THE JAPANESE GRAPHIC.
東京發兌
近事画報改題
戰時畫報
明治三十七年三月九日第三種郵便物認可
毎月三回發行
第十八號
明治三十七年八月十日
合名會社 近事画報社

▲愛讀諸君に申上候

▲本誌の特派員、及び特別通信員の**部署**左の通り移動を生じ候

一、第一軍の方面

一、（畫圖）　特派員　岡部天籟子
一、（畫圖）　社友　岡本月村子
一、（寫眞）　社員　山田忠吉子
一、（寫眞）　社員　岡曉嵐子

一、第二軍の方面

一、（畫圖）　特派員　小杉未醒子
一、（寫眞）　社友　本田雄一子

第〇軍旅順の方面

一、（畫圖）　社員　木村半仙子
一、（寫眞）　社員　岩瀬庄子

第〇軍從屬

一、（畫圖）　社員　荻田天山子（從軍確定せり不日出發）
一、（畫圖）　社員　横井紫瀾子（同上）

右各員は已に戰地に在り

右の如く部署相定り候上は、遼陽の**東面**に於る第一軍の大活動、遼陽の**南面**に於る第二軍の大猛進、及び第三軍が**旅順攻陷**の大戰鬪に至る迄、一切漏れ無く其**實況**を寫出し、正確なる**無數**の**實寫圖**を以て本誌の**全面**を**充塞**するに至り、愛讀諸君の御渴望を滿たし以て從來の御眷顧に報ゆるを得べしと信じ居り候。

右人員が目的地に對する**既着**及び**既發**の日取りより推すに早達の分は早ければ次號より相達し可申候間、樂んで御待ち被下度候。

右人員の外、普通の通信員は毎軍に四五名づゝ依賴致しあれども右は各々本務ある人々にて、其姓名を公表し兼る場合あるを以て、夫等の分は御吹聽致さず、尙ほ**海軍**將士の中には時々實寫圖投寄の榮を賜ふ人々尠からず、右は本誌の特に感荷に勝えざる所なり。

戰時畫報第十八號目録

繪畫

讀物

注意一讀を乞ふ

- 內地及び海外に於る著大の事柄又は奇異珍怪の事物あらば其圖を**投寄**せられんことを切に望む
- 我が數十萬將士の外征の辛苦と、其の戰功とを**寫出**して、國人に**目擊**せしめ之をして**感奮興起**せしむるは、戰時畫報の、自ら任じて本務とする所なり
- 故に、海陸諸軍に關する**戰鬪**の狀況は勿論、其他、戰時の**笑話**又は**苦辛**及び服裝器具に至る迄、苟も國人に知らしめ得べき者は、**誰人**にても、其の**圖畫**を寄稿せられんことを望む

　但し右**投寄**せらるゝ畫圖は、**略圖**にて可なり、本社には著名の畫工數多ある故に、忽ち是を精密なる**本圖**に直して揭るなり、故に**素人**の畫にても構ひ申さず候、ほんの**スケッチ**にて不苦候、**畫と名づけ難きほどの粗圖**にても宜しき故に、**投寄**せられんことを乞ふ、(圖は粗にても、之れに、何年何月何日、如何なる塲合の景と、記入あるを要す、本誌の畫圖はなるべく寫實を主とするが故に、年月日地名等の**確實**を要すればなり)

- **野營**中の有樣、又は**艦內**生活の實況、凡そ**何にても注意すれば、畫とならざるもの無し**、(又是等外征の辛苦を、國人に知らしむるの必要あればなり

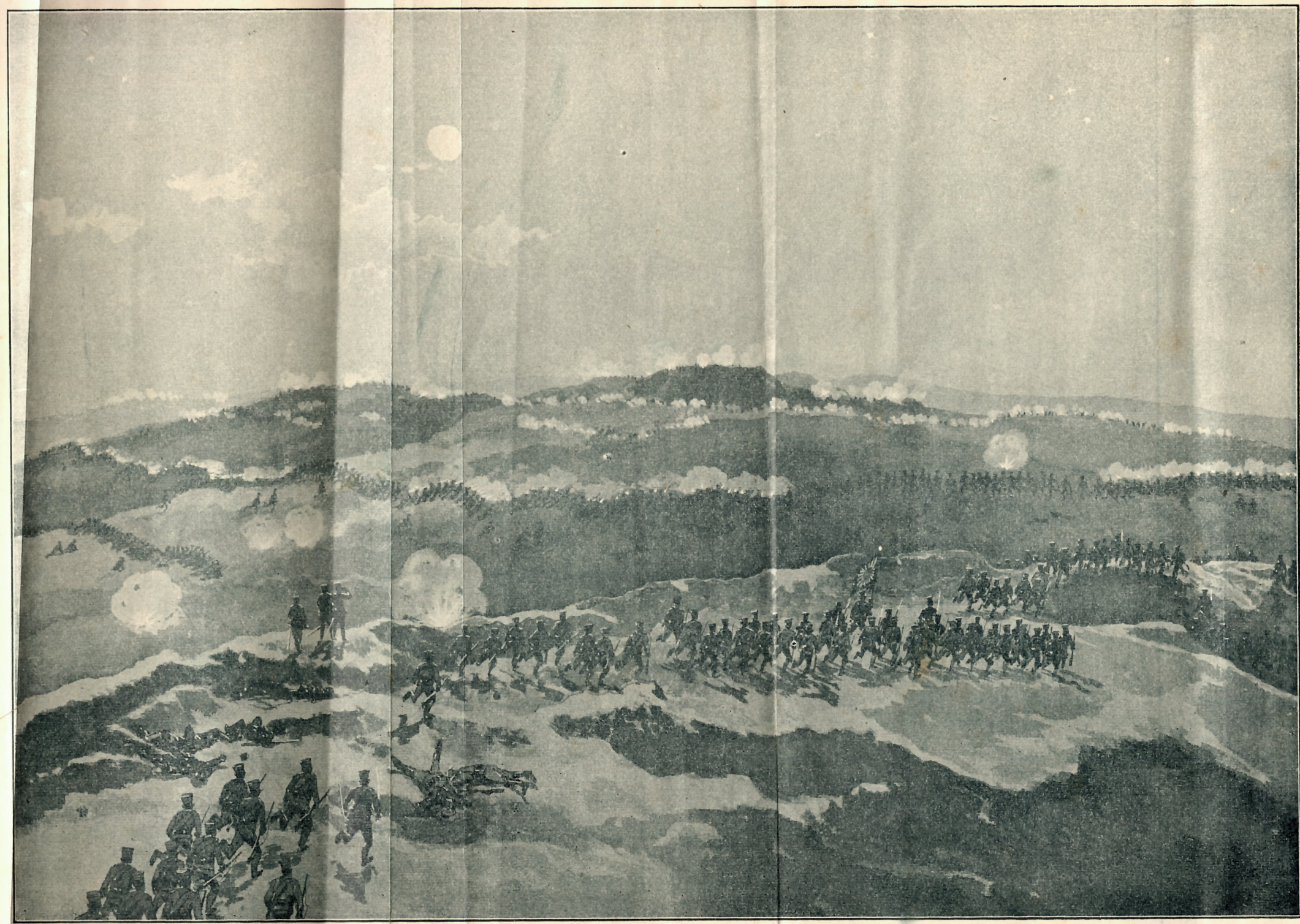
　特に、**滑稽笑話**の類も甚だ之を好む、非常なる**辛勞**の事柄も可なり、陣中の**慰事**も可なり、注意すれば、總て畫に入らざるもの無ければなり

- 上記の事柄を**投寄**せられんことは、本誌の切に冀望する所に有之候也
- 投書**宛名**は、本誌編輯主任なる、東京芝區櫻田本鄉町十七番地國木田哲夫方とせられんことを請ふ

第一軍の一部が草河口附近に滯陣中、雨繁く屋舍乏しき爲め、兵士の或者は樹上に圖の如きものを作りて露營せり。(社友岡本月村子實寫)

The Arn ... wards the
great discon
in which t

猶興舍印行

大石橋の大夜襲

大石橋の激戰に於て七月二十四日は我軍頗る苦戰に陥りし爲め、我が軍司令官は、其右翼團體をなして大夜襲を斷行せしめ、其夜の十時より翌二十五日午前三時までに大平嶺附近の敵の堅固なる堡壘二ヶ所を奪取せり○第二軍の右翼某師團廿四日の夜十時太平嶺の東なる敵の第一陣地を奪ひ更に其西なる第二陣地に向ふ所○左方の最遠景は靑石山の敵壘より發砲する所○其前なる遠景は我軍敵の歩兵を散兵壕より驅逐する所○前面は我歩兵の今方に敵壘に迫り、敵は銃砲火を亂射して必死防戰する所○我歩兵の第一線は今方に右方より第一中隊及第三中隊の掩護射撃に依り第二及第四中隊の躍進する所○前景は第二線なる豫備隊の軍旗を擁して前進する所○前景に累々たる死屍は第一陣地陥落の際塹壕内に斃れたる敵兵の死屍なり○全景は全線の大突貫に移らんとする約十分前の光景なりとす。

When our Second Army (*under General Oku*) attacked the enemy at Tatungken, they fought most desperately through the day, and in the coolness of the night, our right column made a final rush towards the enemy's left column, situated on the elevated land and secured victory.

猶興舍印行

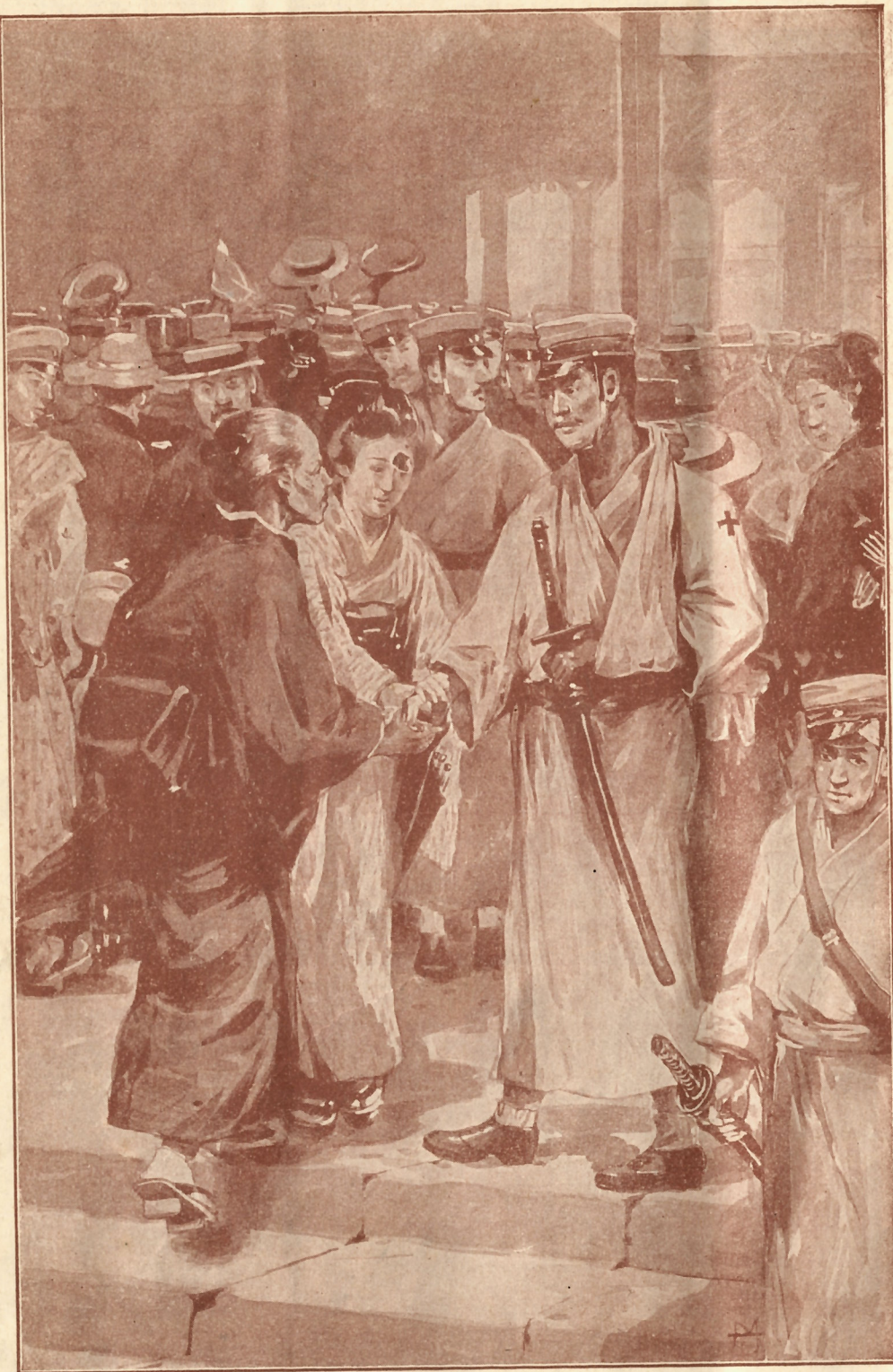
閣上の露營

第一軍の一部が草河口附近に滯陣中、雨繁く屋舍乏しき爲め、兵士の或者は樹上に圖の如きものを作りて露營せり。（社友岡本月村子實寫）

The Army under Generar Kuroki, to protect themselves from the heavy rain (*which naturally caused great discomfort*) made an original shelter for themselves in the trees, in the form of a bird's nest, in which they comfortably passed the night. (*By our Correspondent Mr. Okamoto.*)

注意一讀を乞ふ

負傷勇士の新橋對面

七月二十一日第二師團に屬する負傷兵新橋停車場に着す、此日尤も出迎人の情を動かしたるは、一士卒の左腕を傷つけながら日本刀を提げたるが、停車場の出口石階の處まで出でたるに、其母と細君とがイみ居たるに走り寄りて互ひに手をば握り合ひしが、軈て愉快げに打笑ひて「阿母さん安心して下さい傷は輕いんです、今度は御庇陰で愉快な思ひをして來ました」と。

Arrival of a gallant soldier at Shimbashi Station, Tokyo. who was wounded at the front. His mother and wife receiving him and congratulating him on his safe arrival. Soldier: —"Mother! please do not worry about me. My wound is very slight; but I am very glad to say I did my duty."

細河沿の難攻

七月十九日の細河沿占領公報中に曰く『細河沿附近の敵の陣地は、隘路口を扼し二十乃至百米突の比高を有する高地線にして遠く陣地を瞰制し、且つ堅固なる防禦工事を施し、其左側は細河を距てゝ超ゆべからざるの山地あり、右側も亦遠く楊木溝より高峻なる山嶽を攀越するにあらざれば迂回するを得ず』と、以て其難攻たりしを想像するに足る。

At the Hsi-ho-yen engement which lasted from July 18th to the next day, the right column of General Kuroki's Army destroyed the enemy.

旗艦三笠に於ける東郷大將の寫眞

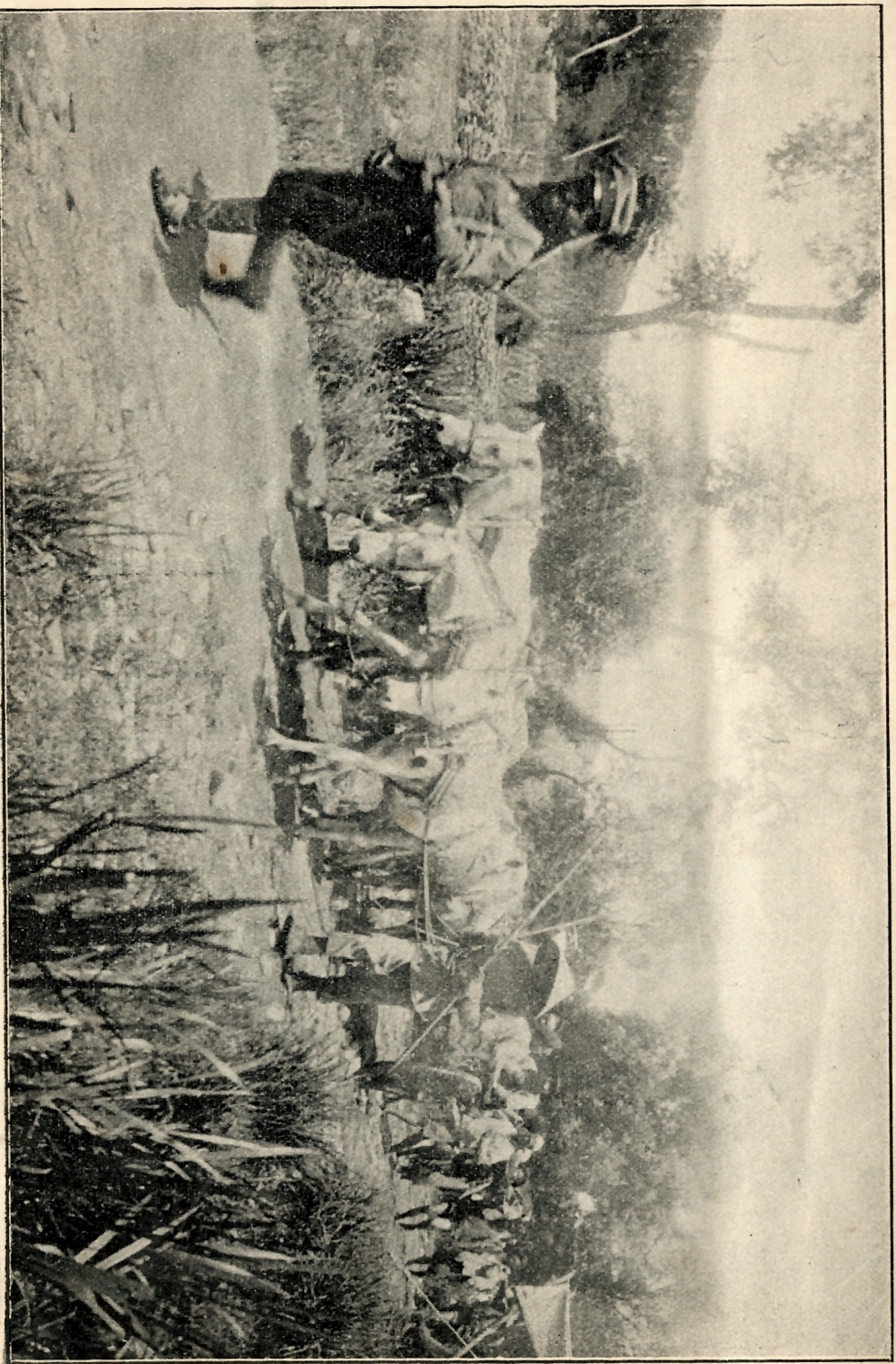
滿州丸の一行は東郷司令長官を三笠艦に訪ふ、圖中正面の老紳士こそ「アドミラルトーゴー」として全世界に名高き我が東郷大將なり、これと對するは日本新聞記者を代表して長官に感謝の意を表せし三宅博士なり、此一室にて内外新聞記者は長官と會見せし也。

Foreign Attaches and war correspondents, both Japanese and foreign on the war viewing vessel the "Manchuria" visited Admiral Tōgō on his Flag Ship the "Mikasa." The officer in the centre of the picture is the Admiral.

日本婦人を虎の餌食

例の支那人の話說に、ダルニーに於ける露の某將官は日露の間切迫せし時、兼て鍾愛し居たる日本婦人二名を動物園なる虎の檻に投げ込み、見る間に猛獸の餌食となしつ、鳥々ヤボンスキーの血祭りを爲したりと喜びし由なるが、これも露人を虎の如く恐るゝ支那人の噂なるべし。

At Dalney, the Russian officials caught two Japanese women who were endeavouring to make their escape, and put them into a tiger's cage at the Zoological Gardens, where they were quickly devoured. This story seems too inhuman to be credited; but it was related by the Chinese who fear the Russians more than tigers.

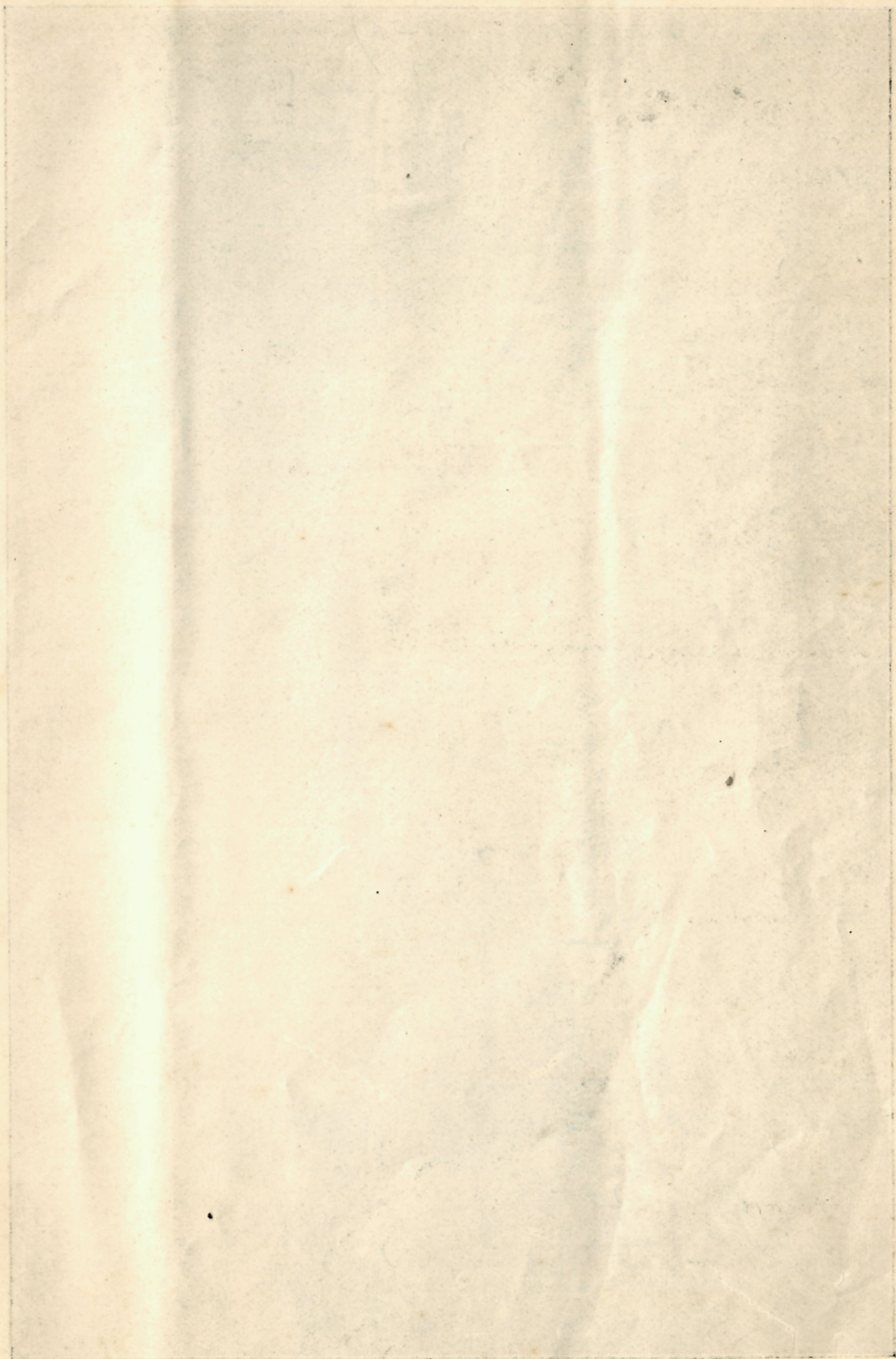
摩天嶺逆襲の捕虜後送

七月十七日、摩天嶺再逆襲の時負傷捕虜を護送する光景。（七月十八日、連山關附近にて社員山田忠吉子撮影）

二人にて十三人を捕獲す

得利寺の敵既に總崩れとなりし時、逃げ損ぜし露兵十五人路傍の民屋に隱れたり、斯くと見たる吉田小隊長及び石田一等卒は、直に追撃して其二人を殺し、猶も火を家に放つて燒打ちにせんと試みしかば、中なる十三人の敗兵忽ち武器を投出し戸口に整列して降服を願ひたり。

Theirteen Russian refugees who were hiding in Chinese residences, caught by only two Japanese.

雪裡店より輜重車前進

雪裡店より林家臺の間に於ける軍用品運搬輜重車前進の光景。（七月八日、社員山田忠吉子撮影）

我が騎兵の營口占領

大石橋占領と同時に第二軍騎兵の一隊は七月二十五日營口を占領せり。

The Japanese Army occupying Yingkow.

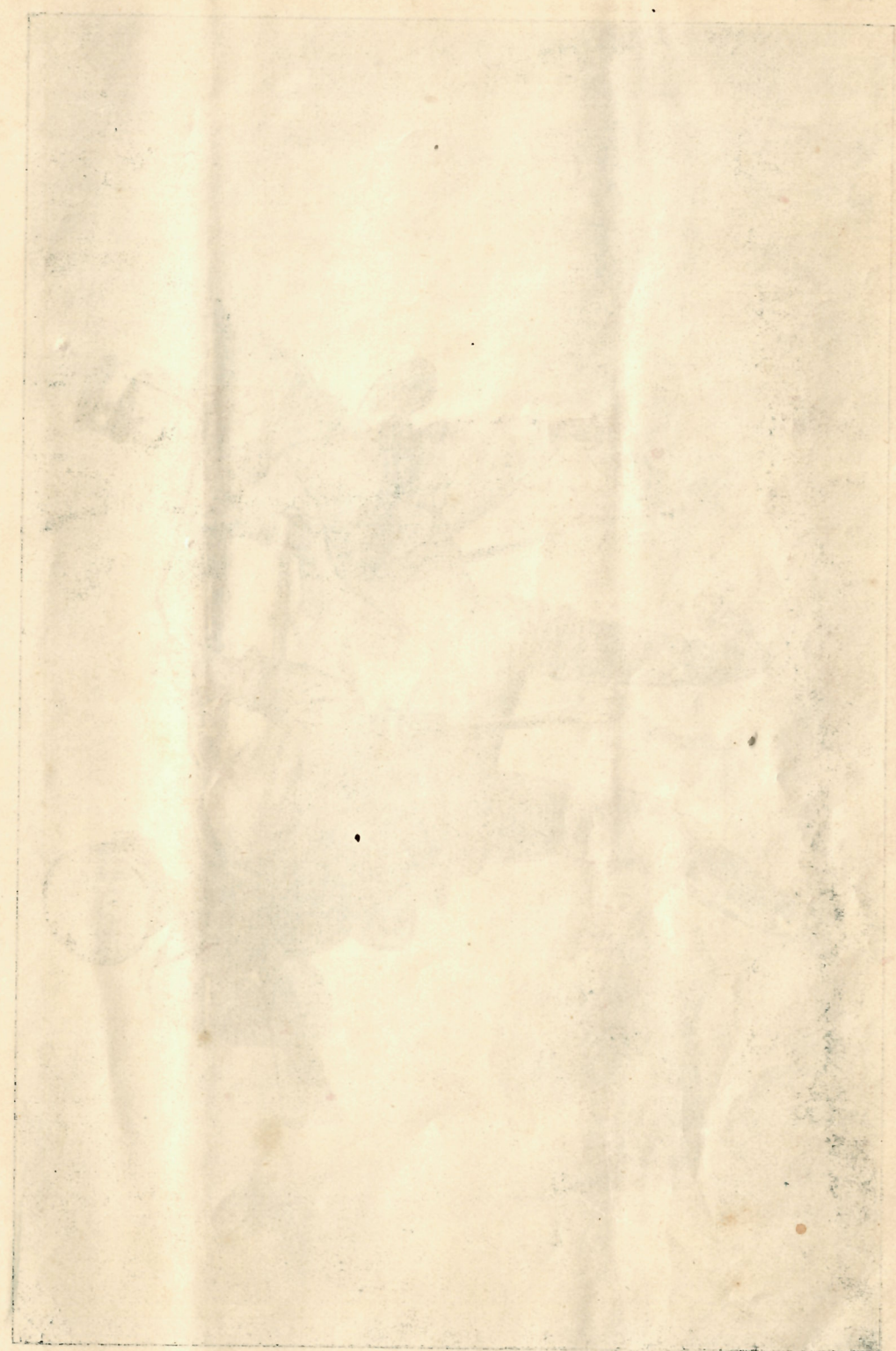
敵と耦刺す

七月四日拂曉前、敵兵我が摩天嶺の前哨線に來襲するや、一等卒勝彦市は戰鬪斥候となりて右翼に出でしが曉霧深くして敵の在否を知るに由なし、他の斥候兵皆去つて小隊に合せしも、彼は獨り耳を鋭くして聲を知るべに敵中に突進し、縱橫奮鬪して敵數人を殪し身も亦數創を被むる、偶々敵兵霧中より現はれ出で銃劍もて橫ざまに一等卒の胸部を貫く、彼また屈せず銃を執て敵を衝き返し膂力餘りて鍔元まで衝き通し、劍身爲めに彎曲し深く敵の腹部を貫き、相倶に刺違へて戰場に斃る、彎曲せる銃劍今猶軍中に珍藏せられ、傳へて美談の種となる。

At the Motien-ling engagement a Japanese private fought with the Russians and was killed.

逃亡捕虜の扮裝

松山の逃亡捕虜一同は、何時の間にか頭は五分刈とし口髭を落し、縞の單衣を着し、一見日本人の如く罐詰鹽肉飲料水傘ナイフなどを持ち、大尉は肉切庖丁と綱、英文字入日本地圖を持ち居りしと。

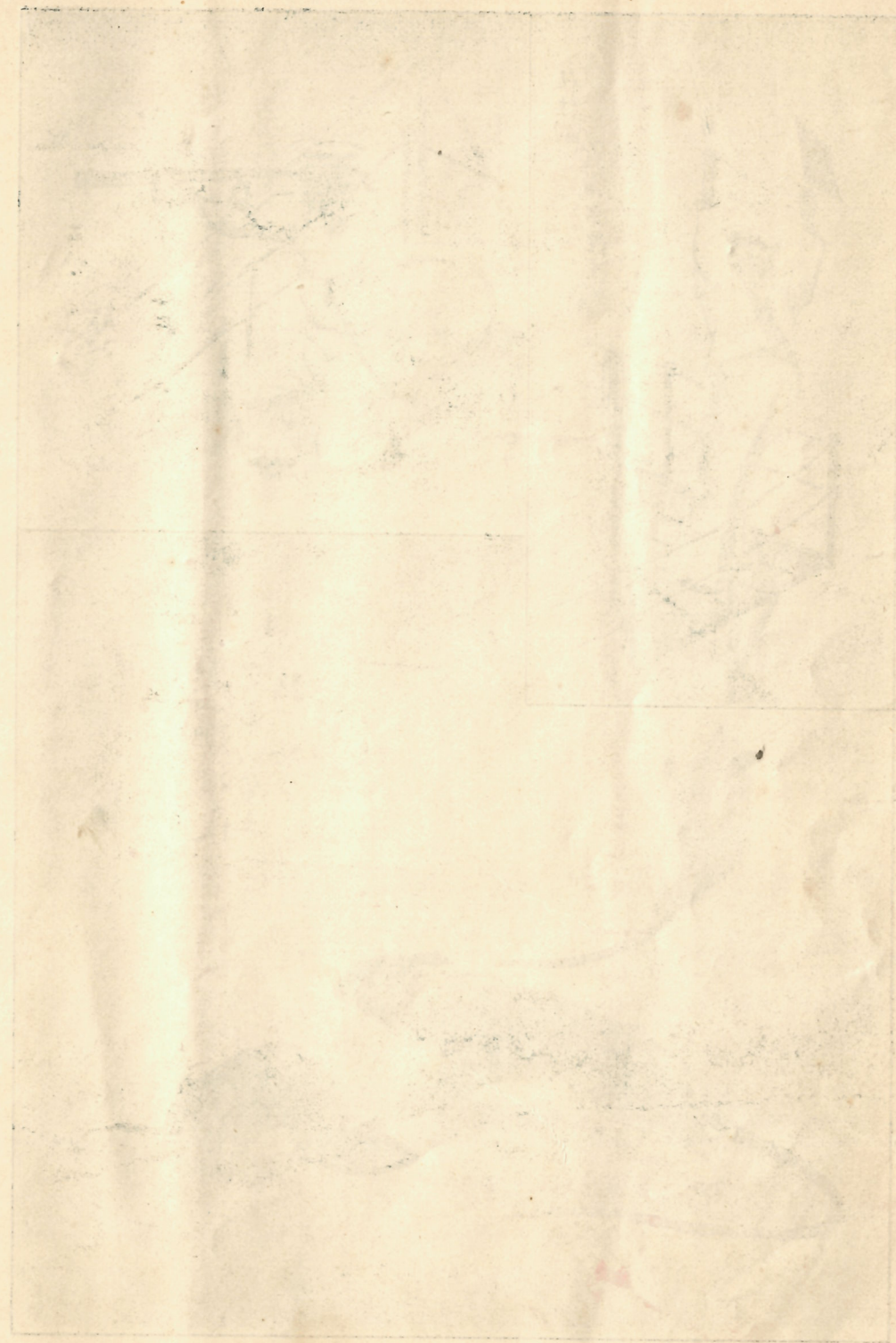
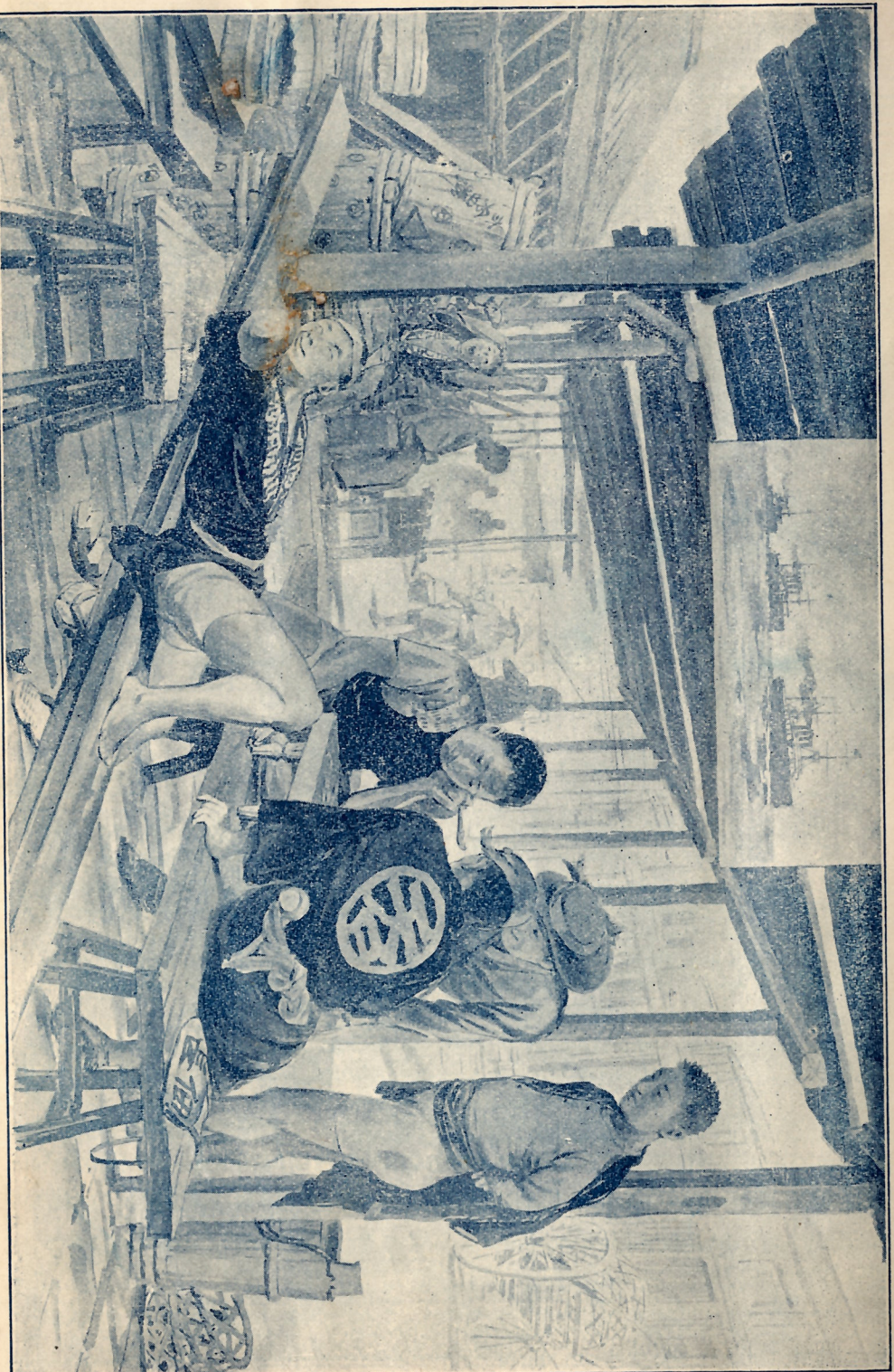
At Matsuyama, the Russian prisoners dressed themselves as Japanese and attempted to escape, but they were caught.

三笠艦の信號兵と懸賞五錢の捕虜

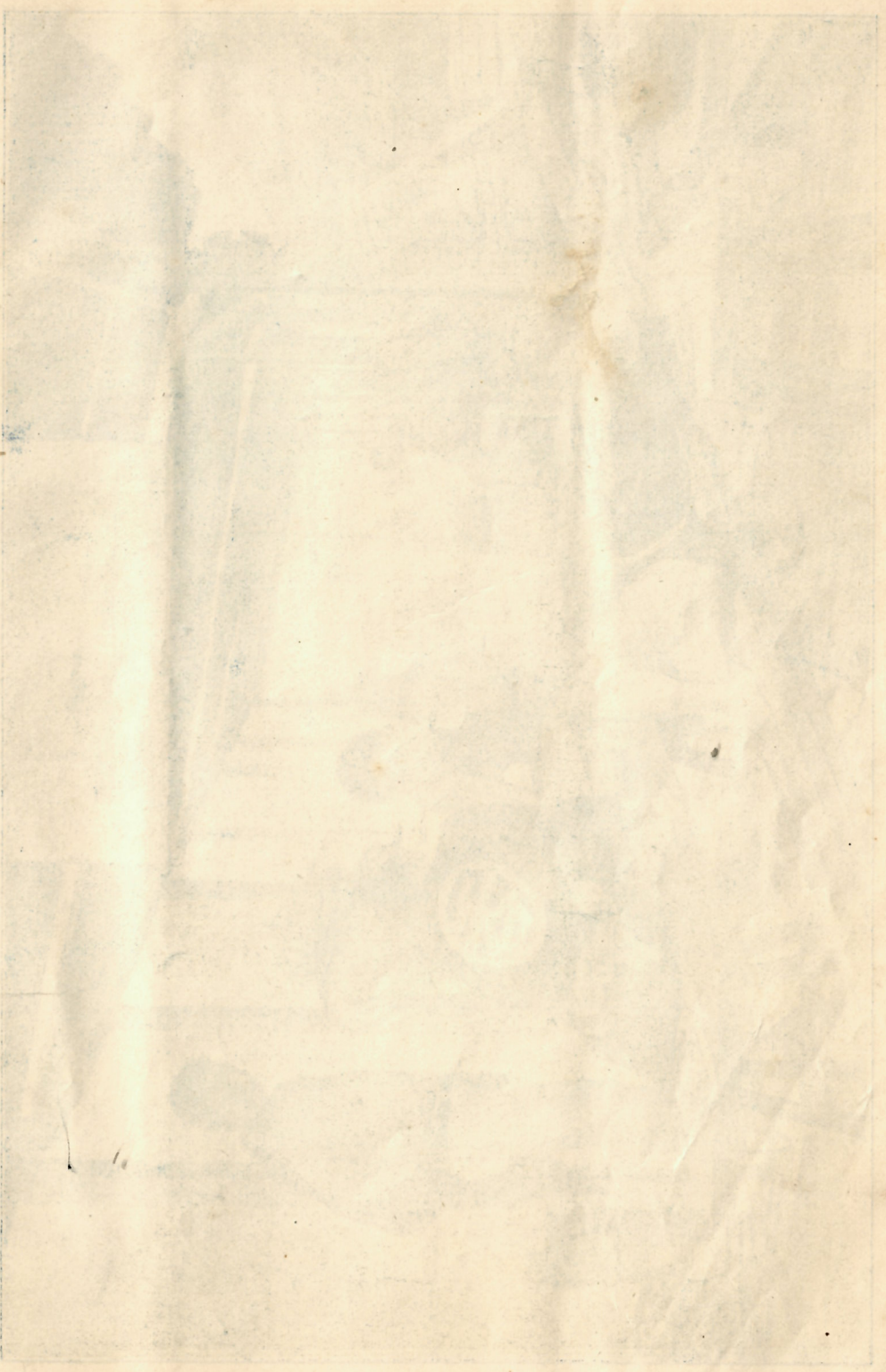
上圖は東郷司令長官坐乘の三笠艦信號兵、下圖は三笠艦の懸賞捕鼠告示なり。(共に三笠乘組島野氏實寫)

The upper picture. A signal bluejacket on board the "Mikasa." The lower. Our ships being infested with rats, the following notice is posted up: — "A reward of 5sen paid for every rat caught."
(Sketched by Mr. Shimano on board the "Mikasa.")

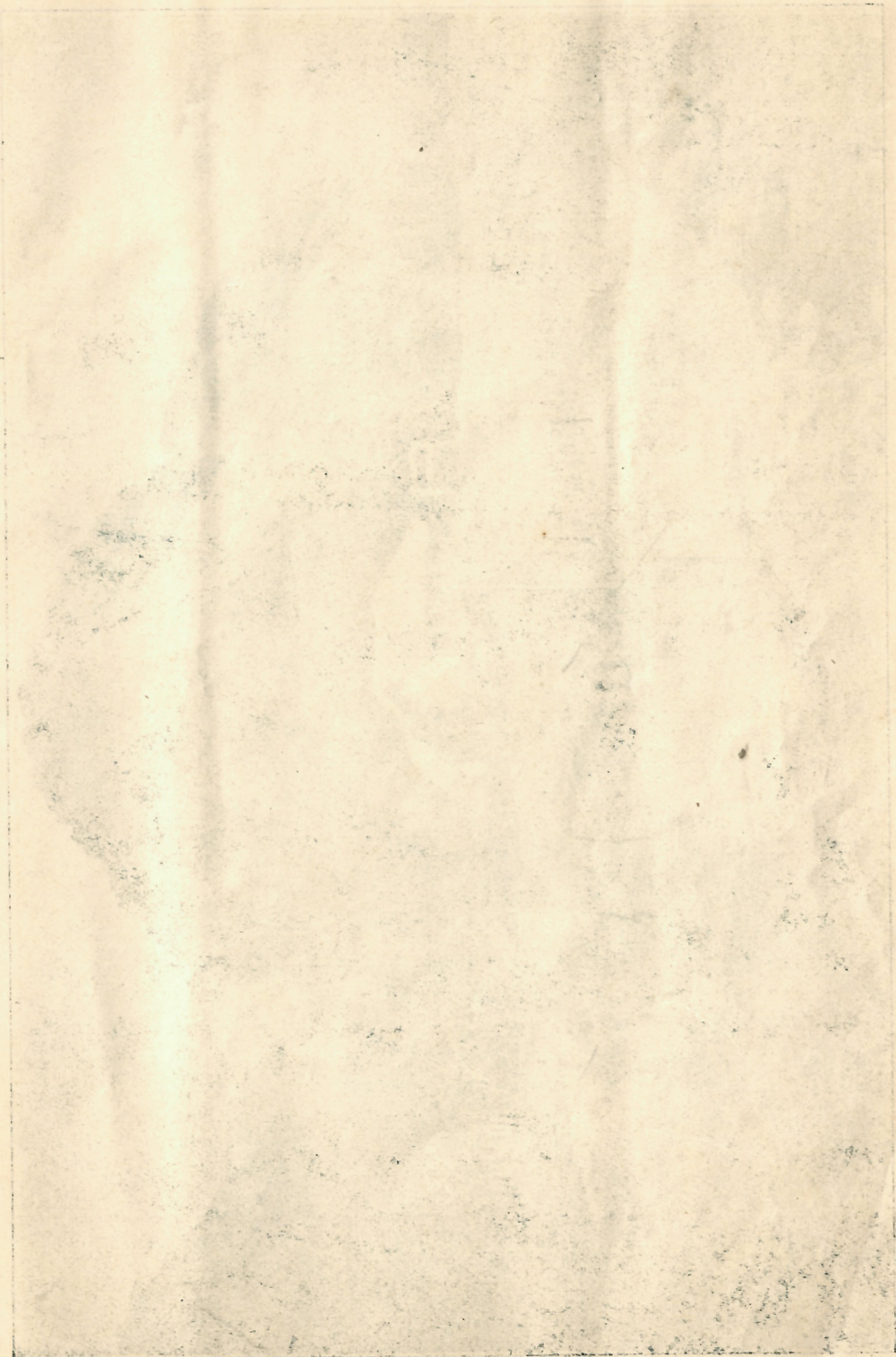
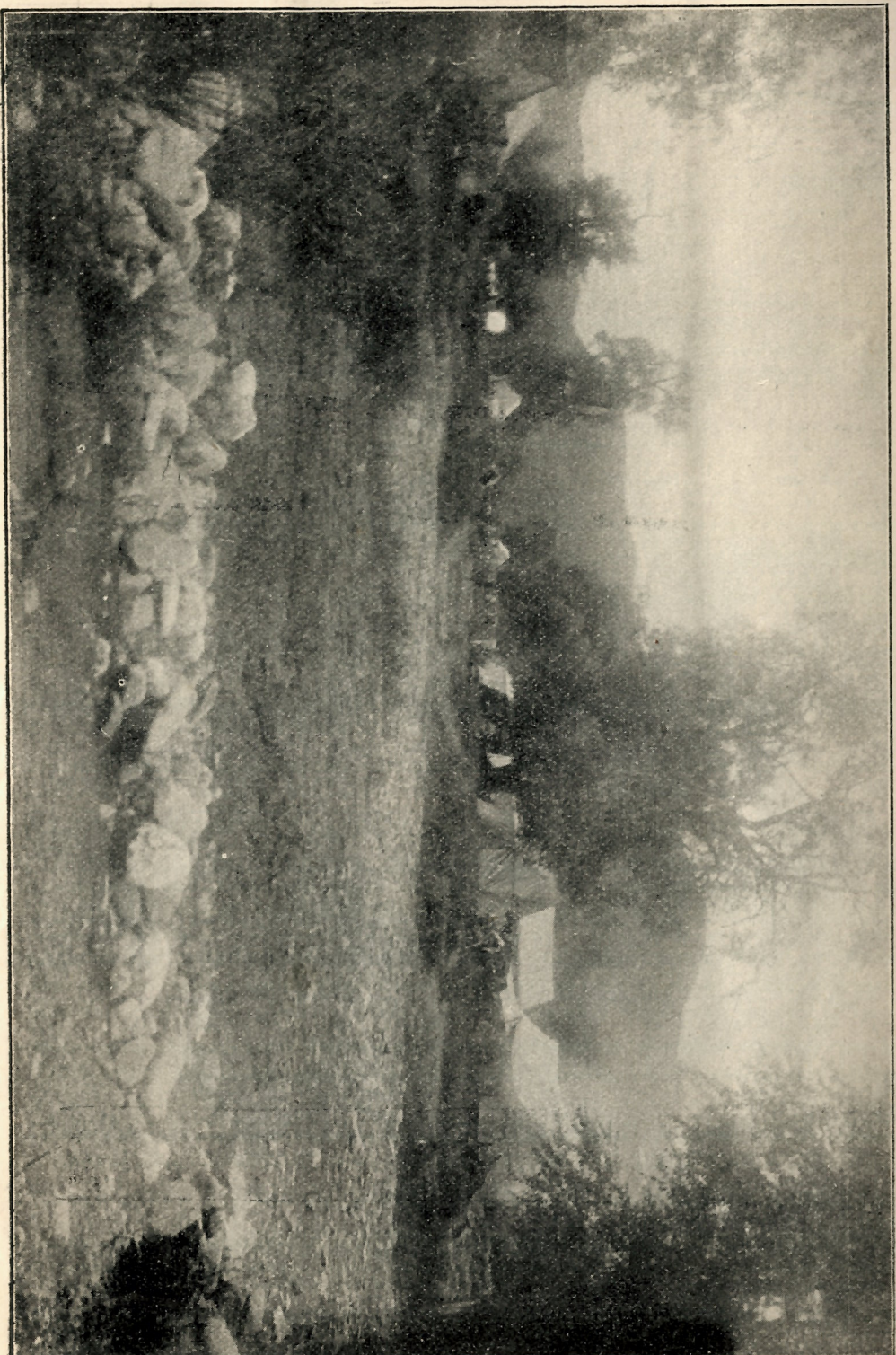
七月四日大摩天嶺の逆襲に吉井少尉は最も奮闘し、當るを幸ひ斬り倒せし敵の數實に十六人、某上等兵が曉の光にすかして見し時は、恰も同少尉血刀を杖に一息き入れつゝありしときにて少尉の全身殆ど血に染まり、其傍に露兵の伏屍二三人横はり居しといふ。

At the Motien-ling engagement Sub-Lieut Yoshii killed 16 Russians. He is resting with the Nippon Tō (Japanese sword).

露艦魚河岸を悩ます

浦鹽艦隊太平洋に突出して東京灣口を窺せし爲め、總房よりかけて相摸沿岸の漁師は出漁せず、爲めに東京唯一の魚市場なる日本橋の魚がしは平日の熱鬧に引きかへ、欠伸まじりの將棊とは、魚がし初まりて以來無き圖なりといふ。（七月二十九日社員實寫）

Owing to the appearance of the Russian Vladivostock Squadron in the Pacific Ocean, the fishermen could not go on their usual fishing expeditions in the neighbouring seas, which caused scarcity of fish on the Tokio market.

黒木大將等の魚釣り

對岸三人の起立者の中央は黒木大將、其右は藤井參謀長、こちらの岸の一竿を手にせらるゝが久邇宮殿下、滯陣のつれ〴〵なるまゝに草河口の谷川にて鱗釣りの光景。（七月十二日社員岡部天籟子寫生）

Commander's and Prince Kuni, of General Kuroki's Army angling at their leisure. *(By our Special Artist Mr. Okabe.)*

第一軍司令部の野營

二道房身に於ける第一軍司令部野營。（七月二日社員山田忠吉子撮影）

惠山沖露艦の臨撿

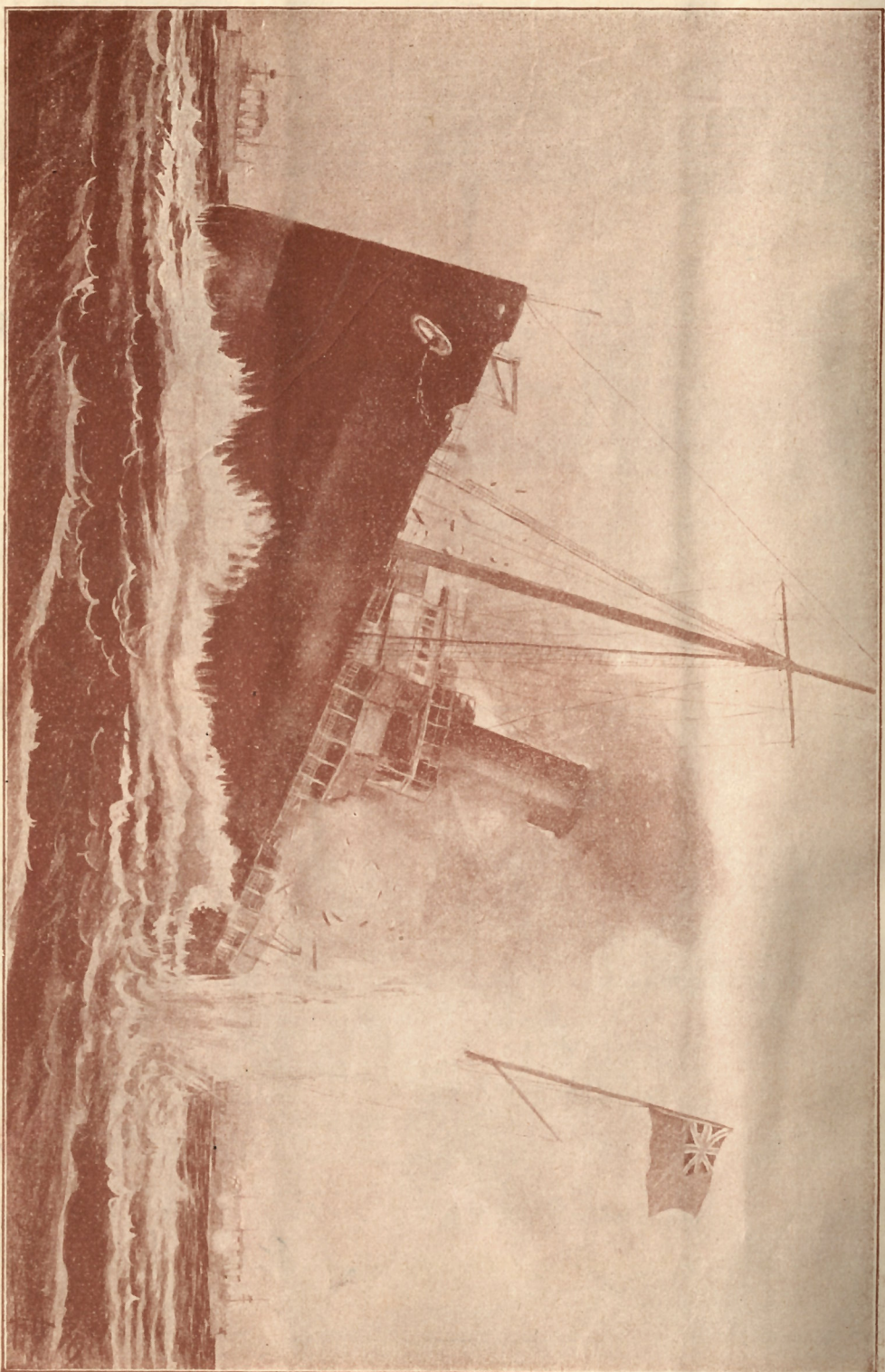
浦潮艦隊が惠山沖にて共同運輸丸を監檢せし時、リユーリック號の將校下士卒二十一名は船内の各室を隈なく檢査し、金庫を開かしめ在中の船員手帳其他封緘あるものは悉く之を破り、船長室にありたる半打ばかりの麥酒を能き獲物とや思ひけん、兵士等爭ふて之を飲み盡し、手巾其他目星しきものは之れを懷にし、甚しきは乘客の所持せる參圓入の財布を奪ひ去れるありと、殊に船長室の兩眼鏡を奪ひ去り磁石硝子窓を破壞したるが如き、其亂暴言語同斷なりし由、函館なる社友が遭難者の實話に依りて描きし圖はこれなり、船側にて旗を振るはリユーリックに信號するなり。

The Russian Vladivostock Squadron in the Pacific Ocean, sinking a Japanese merchant ship, after removing beer, watches, momey and every thing of value they could take.

戰地輕便鐵道にて捕虜後送

黒木軍より捕虜を輕便鐵道にて護送する實況。我軍が負傷兵の後送も亦此の鐵道に便にしたる。（七月七日 社員岡部天籟子寫）

Simple railway used by General Kuroki's Army, carrying the Russian Prisoners. (*By our Special Artist Mr. Okabe.*)

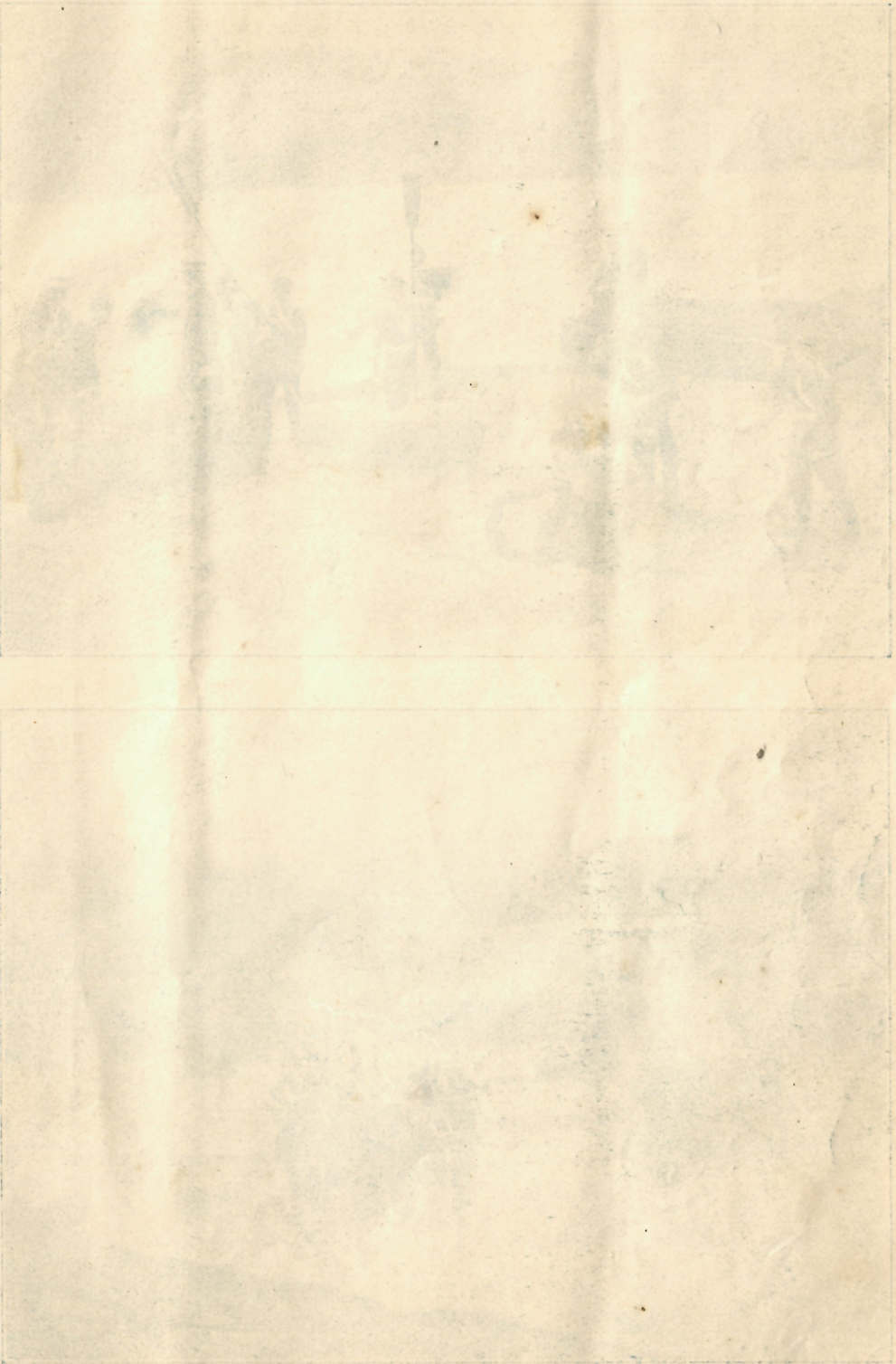
ナイトコンマンダーの撃沈

英國汽船ナイトコンマンダーは七月十七日香港を發し橫濱に向ふ途中、浦鹽艦隊のために擊沈する處となりぬ、英國は露國に向ひ直ちに抗議を申込みたり。

The Russian Vladivostock Squadron, sunk the British steamer the "Hnight Commander" in the Pacifi Ocean.

軍用の渡河浮袋

近頃獨逸軍隊にて用ゆる渡河用の浮袋なり、使用の際空氣を入れることは空氣枕と同樣なり、輕きゆえ持ち運びに便なり。

The buoy used in the German Army when crossing a river.

愛國婦人會の貴婦人

右、愛國婦人會理事德川公爵夫人泰子。左、同會評議員鄭濱子。

To the right is the portrait of Princess Tokugawa Yasu, manageress of the Ladies' Patriotic Association. To the left, Dowager Tei Hama, councilor of the same.

戰時畫報　第十八號

出鱈目の記

矢野龍溪述

▲人の名

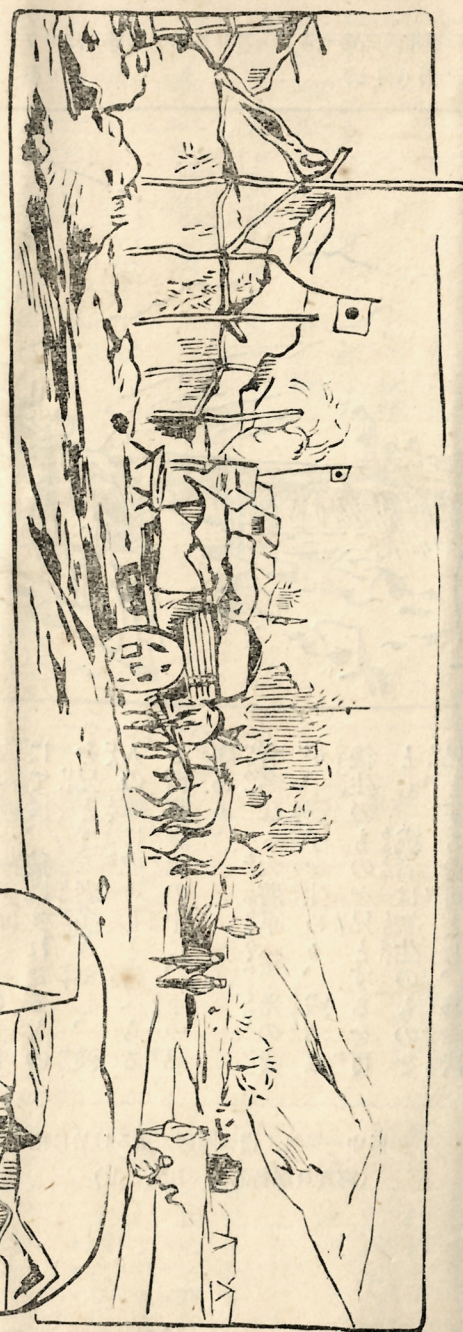
生れた子に命名するは、一寸と六ケ敷ものなり、余の如きも是迄、名親に頼まれて、人に命名せしこと少からず、七月中にも知人より頼まれ、生兒に命名せること二回あり、いづれ其子の生立の幸福繁昌を祝する目出度き名を付くるは、通例ながら、扨て一旦思ひ煩ふときは、彼れ善からむ、此れ惡しと、往々に惑ふことあり、一たび惑ひ始むるときは、善きが上にも善きものをと躊躇し、名の意味が好ければ唱への口調如何と顧み、唱へが好ければ、意味が不足なり、抔と種々に考ふること多し。

故に目出度き善き字の中にて、差向き胸に浮びし最初のものを、直に採擇すること、最も善き方法なるに似たり、古人も生兒の命名には、成るべく無造作にして、其時に目に觸れ胸に浮びたる善き名を付くる流義の人、多きが如し。

孔子は聖人とも言はるゝ人ゆゑ、其子の生れし時には、定めて六ケ敷好き理窟ある名を付けたるべく思はるれども、實際は然らず、孔子は其子を鯉と名づけたり、其のいわれを調ぶれば、子の生れし時に、丁度、人が鯉魚を贈り呉れたる故、直に之を名として鯉と名けしなりと云ふ、孔子のみならず、有名なる人に此例多し。

故に、七月中に、余の頼まれたる一兒には、勝の字を用ゐたり、則ち我軍が連戰連勝故に差向き之を擇びしなり、又他の一人には安の字を用ゐたり、當時此兒の父が從軍して恰も安東縣に在り、且つ先頃鴨綠江の戰に、我軍勝利にて安東縣を占めたる吉瑞に取り、又安の字は其の意義も甚だ宜しければなり。

歐米人は、生兒の命名に、餘り心を勞せぬ樣なり、何となれば、通例はクリスチヤンネームを用ゐ、ジョンとか、チャーレスとか、ゼウジとか、大抵其名は定まり居りて、和漢人の如く工夫を凝らす必要なければなり、但し歐米人は其の父祖のクリスチヤンネームを、其子に命ずること少からぬ樣なり、人情は相似たるものにて、我國にても其家の通名、又は祖父曾祖父先代の名を、生兒に授くる者多きと、恰も同樣なり。

福澤先生が、其の令息に、市太郎と命名されしは、先生の家の先代にありし名なりと言はれしやに覺ふ、今の市太郎君則ち是なり、先生も六ケ敷名を擇ばれざりしと見ゆ。

併し、支那にも歐米にも無く、日本に一種

戰地畫報

特派員　岡部天籟子

○從軍行——途上所見（其一）

安東縣兵站司令部（七月六日…岡部特派員寫）

○從軍行——途上所見（其二）

沿道の民家、先頭までは皆露兵の役所たり（七月七日…岡部特派員寫）

の風とも見るべきは、其名を其姓と連續せしめて意味を作るの一事なり、例せば山の田、即ち山田と言へば、善く穀物が出來ると云へる連續の意味にて、豐作と命ずるの類なり、姓の意味に名を連續せしむる是風は支那人抔より之を見れば大に驚くとなるべし、森茂の類の如し、此の一事は、支那には絕無の樣なり、且つ支那の姓には意義なきもの多し、中世以來、支那人の名を擇ぶは、多く之を經義字義に取る、偶には孔子流の人も之れ無きにあらず、日本の如く姓に連なる意味の名を擇ぶは世界無類にて日本のみに限る。

別事ながら、日本人は字義に於ては、折折通せざることを爲すとなきにあらず、東京府、京都府、の名の如き是れなり、若し北京ならむには、其府は之を順天府と名け、而して此地は北の京なるが故に、之を北京と稱す、若し北京府と命名せば、支那人は其の意義の通せざるに驚くならむ、東京府京都府抔の名稱に至ては、漢學者より言はゞ、可笑き名稱なり、支那風に言へば、之を千代田府と稱へ、而して東の都なるが故に、之を東京と稱するを當れりとこそ言ふならむ、併し名稱は何でも善し、間違ひなりにも、呼び慣るればそれにて可なり。

▲孟子の子、韓信の子

前に、孔子の子は鯉と云ふことを述べしが、孟子の子の名をば知らぬ人多き樣なり、眞僞は知らざれども、塵談に、孟子の子、名は睪と記せる旨を書せしものあり、或人の說に、睪は孟子の從兄弟なる孟仲子の名なりとも云ふ。

又韓信は刑せられて、其族を斷ちしと傳ふ、然るに或書に、韓信の孤兒は蕭何が憐みて、之を匿まひ、南越南に逃れしめ、王尉佗に托したり、此兒が成長せし後は韋を姓とす、韓の字の一半を取しなりと云ふ、此人は後武功ありて富貴に終りし由、蕭何が遺孤を尉佗に托せし書は後世まで韋氏に珍藏され居る旨をも記せり、ちと信じ難き話ながら、左も事實らしく記載せるを見たり。

「我が兵の炊事場」

○從軍行——途上所見（其三）

湯山城

家らしき家は僅に一軒、そは我が兵站司令部にて其他は大抵あんぺら小屋かさもなくば天幕張にて、中に支那人の飯館饅頭屋あり又日本人の酒保もあり

（七月八日……岡部特派員寫）

近衛後備工兵獨立中隊の第三小隊長見習士官青木三造氏指揮の下に苦力（クーリー）を使役して工事を急ぎつゝあり（七月八日…岡部特派員實寫）

○從軍行―途上所見（其四）

湯山城第二軍の架橋工事

▲雙生兒の兄弟

雙子の生れし時、先に生れしと、後に生れしと、孰れを兄とし弟とすべきやは、支那にても論あるなり、我國現在の習俗にては、後に生れたるものを兄とする者多き如し、漢人の筆に成りしと傳へらる西京雜記の中に、下の記事あり。

有名なる大將軍霍光の妻が、雙子を生めり、或者は後生のものを兄とするを可とし、或者は初生のものを兄とするを可とし、議論決せざりしに、霍光は、初生のものは早く此世に出でたるが故に兄とするは順なりとて、遂に此説に定まりしと云ふ、同書の記する所にては、滕公も亦た雙子ありしが、初生のものを兄とし、後生のものを弟とせる由、然れば前漢の有名なる人は、雙子の兄弟を定むること多く此の如くなりし歟。

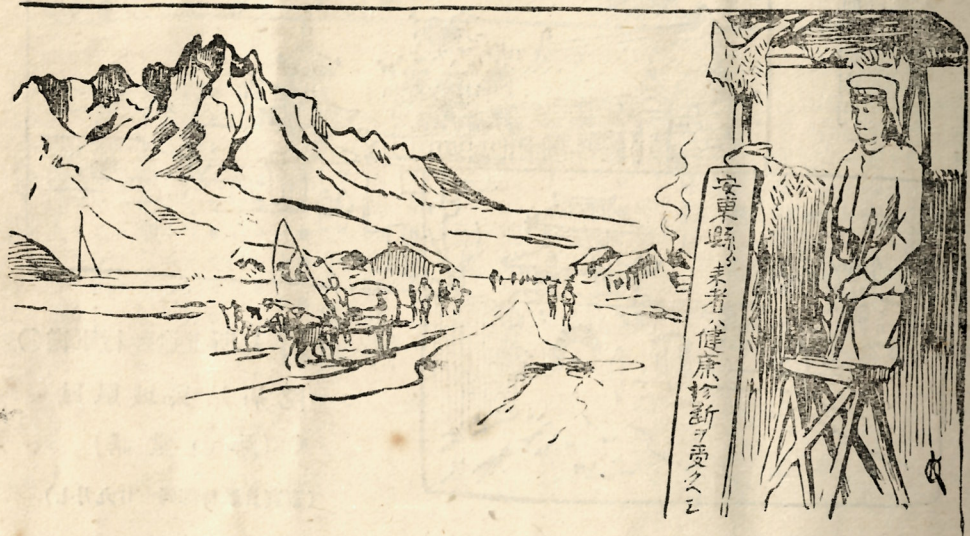
高麗門外鳳凰山の南に於ける第二師團後備工兵第一中隊の輕便鐵道工事（七月九日…岡部特派員實寫）

○從軍行―途上所見（其五）

▲歐米の黃禍説

先頃來、歐米にて、日本の戰勝を見、往々黃禍論を唱ふる者ある由、我國二三の名士より之を駁するの書出たりと云ふ、二箇月許り前に、余は米國の知人の許に、日本の國情を通知せむとて、少し許り記述せしものありし、其中の一節なる駁黃禍論は左の如し、但し前記諸名士の論と異同如何は知らず。

▲駁黃禍論

近來歐米にて、往々黃禍の説をなす者あり、然れども日本國民は、幾と其の意味を解するに苦しめり古來の歷史を案ずるに、亞細亞に於ける大國は支那なり、然れども支那本部の民人は平和溫柔にして他國を侵略せしとなく、又是等の事には最も不適當なる人種なり、彼等は戰に於ても、守るに長じて攻るに拙し、是等の人民を驅つて侵略を企るは、到底不可能の事なり、是れ支那の事情に詳かなる、他國人は皆な能く知る所ならむ。

又日本は島帝國にして、其の地形上、古より遠侵を爲すの風習なし、人民の望む所は、唯自己の存立を圖るに外ならず、故に支那日本が相合して、亞細亞以外の他國を侵凌すべしと聞かば、日清國人は、幾んど之を笑はざる者無かるべし。

既往諸國の例を案ずるに、擅制の君相は、一己の慢心と我慾を滿足せしめむが爲に侵略主義を執る者多し、是れ彼等は、其の行動を國民全體の意向に制せらるゝこ となく、一個の意思を以て、何事をも容易に爲し得ればなり、然れども立憲國は之に反し、何事も間接に輿論の支配を受けざるを得ず、萬已むを得ざるにあらざれば、爭を干戈に訴ふることは、事情頗る困難なり、是れ人情は一般に概して平和を好み、戰なるものは事業を害することを多きを熟知し居ればなり、余は立憲國

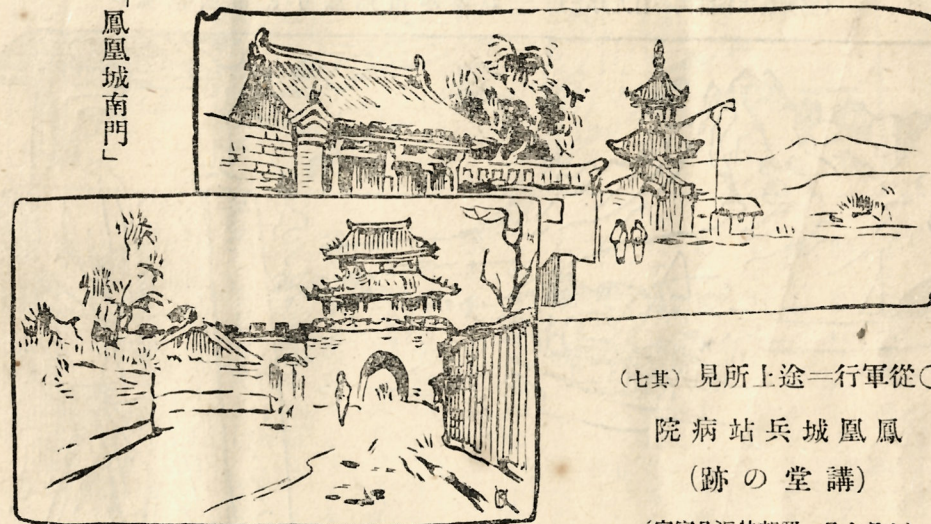
○從軍行―途上所見（其六）

鳳凰城市より鳳凰山を望む（七月九日…岡部特派員實寫）

の歴史に於て、此點に關し二三の取除けなしとは言はず、然れども概して之を論ずれば、其の實例は皆此の如く、事理に於ても、亦た斯くあるべきものなればなり。

日本は立憲國なり、其の輿論は間接に國事を左右するの力あり、故に、不急なる侵略主義を行はむと欲する人有とも、擅制國の如く、容易に之を爲し得ざるの場合あり、日本既に此の如し、而して支那人は平和を望み戰を厭ふの民たり、然るに此の日本と、此の支那とを以て、歐米を侵略するの黄禍ありとは事理に明かなる者の同意し能はざる所なり。

然れども、亞細亞人民中にて、侵略を事とせる者なしと言ふを得ず、夫の亞細亞北邊の未開野蠻にして殺戮の外は他の能事なき人民則ち是れなり、成吉思可汗、鐵木眞、忽必烈汗、アッチラ等が、帥て以て或は印度を犯し、或は歐洲を侵したるは、則ち

「鳳凰城南門」

○從軍行＝途上所見（其七）

鳳凰城兵站病院（講堂の跡）

（七月九日…岡部特派員實寫）

是等北亞の民族なり、是等北亞の民は、文明を距ること實に遠く、單に掠奪を事として、他國に侵入し威武を張るを以て其の習俗となせり、古より支那が代々常に侵擾の害を被ふるは則ち是等北部の人民なり、若しも黄禍の白人に及ぶものありとせば、則ち此種の人民に外ならず、而て此種の人民は、今ま何人が之を統率し居るや、則ち露帝是れなり、若し此の統治者にして、他國を侵略するの主義を執り、是等の民族を驅使して、其慾を恣にせば、歐、亞、二洲の開明國人は、古來の歴史に明記せるが如き、大なる禍害を被ふるべし、故に黄禍の説を聞くときは、日本人は當然露國が此の禍根を含蓄する最も畏るべき者たることを明知せり。

昔し日本が、數千年間の歴史上に、唯一の大侵略を蒙りしは、則ち是等北亞の民族の所業にして、彼等の王たる忽必烈可汗の爲せし所なり、彼れは北亞の民のみならず、併せて南部の民と朝鮮人とを脅從し、是等の聯合兵十萬を以て、日本が

行くは輜重車、歸るは病傷者（摩天嶺にての）（七月十日…岡部特派員實寫）

○從軍行＝途上所見（其八）

四臺子にて

古來見たるとなき大侵入をなし、三十餘年の間、日本をして常に恐懼不安の裡に立たしめ、一時は其の存立をも危ぶましめたり、幸にして我々の勇武なる祖先は、能く彼等を擊退し得たり、當時忽必烈可汗の版圖は、幾んど亞細亞全部を掩ひ、印度、波斯、小亞細亞、歐洲西北部の一部迄も、悉く之を臣從せしめたり、此時に當り儼然として其の獨立を保ち得たりしは獨り日本一國のみなりき、故に日本人は亞細亞人種なりと雖も、今に至る迄其の北禍を恐るゝこと最も甚し、而て今や其の恐るべき民族は「ホワイト、ツアー」（白帝）の下に統轄せられて、又再び日本の存立を危くするの日あらむとす、安ぞ其勢の微なるに及で早く此火を打消さゞるを得むや。

若し露西亞人が、黄禍の説を唱ふるならば、是れ殊に笑ふべし、黄禍の株は日本人支那人にあらずして、今は露國自身の上に在り、歐、亞、諸國の恐るべき黄禍は日本、支那、にあらずして、却

○從軍行＝途上所見（其九）

林家臺兵站司令部（哨兵の小舍は黍殼作り）（七月十日…岡部特派員實寫）

て實は露國に在るなり。若し又歐洲人が亞細亞人を劣等なるものと見下し、亞人が其の當然の權利と、其の獨立とを保存するの働きを目して、之を黃禍と認むるならば、そは大なる誤り、凡そ地球上何れの國人たりとも、自己の存立を全くするは當然の權利にして此の權利を行ふを不可とするの意義なりと云はば、是れ黃禍なる言葉は本來無意義の語と言はざるを得ず。歐米との交通貿易益々增大し其の接觸益益密着せる爲め日本人は、近年益々コスモポリタン（人種無差別）主義に入れり、是れ當然、斯くあるべき理由にして歐、亞、人種の間、別に親疎の感なし、而して其の道德政刑を同うする者をば、格段に之を兄弟視するの情あり、則ち己等の如く自由の權利を得、立憲の政を行ひ、平和の事業を喜ぶの國人は、皆な同胞朋友として之を親愛す、人種の異同は敢て頓着なき實情なり、是れ歐米人の最も知るを要すべき事とす。

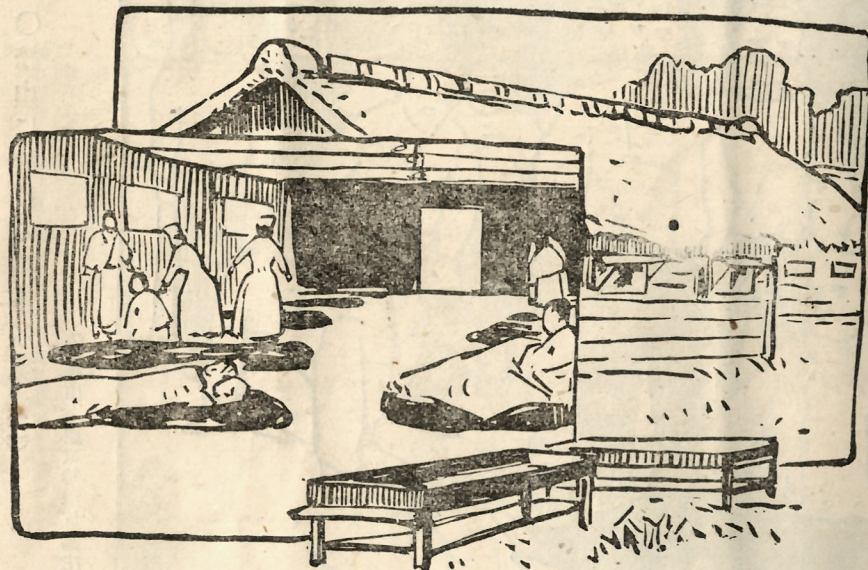
○従軍行──途上所見（其十）
従軍寫眞班員草河口に着し、手馴れぬ天幕張の大混雜　（七月十二日…岡部特派員實寫）

號外賣り

華胥道人寄

電車の開通次第に行き渡るに隨ひ、人力車夫漸く業を失なはんとす、折柄日露の戰、海に陸に日々に酣わになりゆき、都下の各新聞社より發行する號外、殆んど絶え間なし、此に於て事の楫棒を抛ち轉じて號外賣りとなるもの、其數幾百なるを知らず、鈴聲淋々、朝となく暮となく、西に走り東に奔り、大聲疾呼、狂せんとするが如き狀を爲す、綠樹淸陰、華胥の國に旅びし、黑甜の鄕に遊ぶものも、思はず夢を破りて蹶起、先づ何の快報かと問ひ、下駄の齒入れの翁、衣濯ふ媼、亦時に一錢を投つを惜まず、戰勝國の景氣は、提燈行列を別として、此所號外賣りの獨占と謂ふべき有樣なるも奇なり。號外賣りは騷々しきほど、人の耳に立ちて効あり、故に一人二人位にて賣りゆく

よりも、五人七人聲を揃へて、前後縱橫に驅け廻るが賣れ高多しと云ふ、折々は全く揑造無根の報道に驚かされ、腹の立つ事もあり、中には好んで此種の號外を發行する新聞もなきにあらざれば、警視廳に於て一令を發し、何新聞號外と、新聞の名を呼びて賣るべしと達したり、賣子は乃ち信用ある新聞の名は、殊更らに大聲にて呼べども、持てぬ新聞の名は、口の奧にて呼ぶのみ、少しも外へ聞えざれば、依然として疑ひながら欺かるゝもの尙ほ多し。近ごろは買ふ人も號外賣りの聲に依りて其報の價値をトし得るほどに發達せり、如何にも勇しくして勢よき時は、是れ必ず大快報に相違なかるべしと思ひ、買て見る氣にな

○松山に於ける捕虜狀況（一）　（於松山…蘆原特派員寫生）
伊豫國松山に於ける負傷捕虜の收容せられつゝあるバラック病室の光景であるが、近頃南京蟲の發生が甚だしいため寢臺を除き斯く日本流に蒲團を敷いて橫臥して居る

內地畫報　特派員　蘆原曠子

之に反して聲の引立たざる時は、碌な事ではあるまじと、見向かぬ樣になりかゝりぬ。

或る日電車に乘りて行けるに、車中に一人の號外賣りあり、例の如く後鉢卷の大童姿、腰には幾多の鈴を吊るして、動く度に其音淋たり浪たり、蓋し本所深川のあたりへ賣りに行くものなるべし、傍人偶ま何の快報ぞと問ふ、先生得意其大略を語り、意氣軒昂、旣にして曰く是れ單に情報に係る、公報は明日を期すと、左ながら自ら其報道を爲す人の如し、予聞て心中私に笑を失す。

聞く今は號外賣りの數も大に增加し、規律なくては萬事不都合なりとて、組合樣のもの組織せられ、事務所迄も設けられたりと、又盛なりと謂ふべし。

予が家の耳門の扉には鈴を付けて、開閉に隨ひ音する樣になし置けり、一朝婢報じて曰く鈴失せりと、予は必ず近所の兒童の戲れに取り去たるものと思ひ、新に求め來りて堅く結び着けしむ、然るに數

日ならずして後に盗み去らる、不審なれば二三の友人に話せしに、友人等の中にも同じく呼鈴を盗まれたるものあり、此に於て始めて彼の號外賣りの腰に吊るせる、鈴の二つ三つに止まらざる所以を知り得たり、社會の事は誠に思はぬ所に影響するものかな。

痛ましきは出征者の家族なり、號外々々の聲を聞く每に、吉か凶か、夫の身上や如何、父の身上や如何と、先づ胸に波を打たし、買て讀んでは見たし、讀みて若しや、夫や父の身に係る凶報なれば如何にせんと、一號外にも亦幾多の思ひを勞す、可憐無定河邊骨、猶是深閨夢裏人、と吟せし唐人の名句も坐ろに想やらる。

捕虜はどしどし增ふる、それにまだ充分の準備は出來てゐぬので彼等の服裝にまで手が屆かず、そこでシャツ一枚に冬ズボンを穿ち此處に七人彼處に十人といふ風に組々に集つてゐるが、偶に訪問者でも見えると非常にめづらしがり、すぐ寄つてきては丁度見世物でも見るかのやうである

○松山に於ける捕虜狀況（二）

（於松山…鷹原特派員寫生）

山手邊になれば自ら號外賣りの來ること遲く、朝出し號外を晩になりて賣り付けられ、何の事ぞと、つぶやくも少なからず、左れども聲を聞ては何分其儘には過ごし難く、懲りずに復た買ひ、復た欺かる、戰へば勝ち、攻むれば取る我國とは、反對なる露都の號外や如何、若し號外賣りなるものありとせば、其聲は定めて秋の蟲の叢に喞くが如くならん。

讀戰報

鶴山

前岸敵兵今若何。一痕殘月照奔波。誰言鴨綠是天塹。重見王師容易過。（我軍渡鴨綠江）

將軍一笑不言勞。戰勝三軍意氣豪。日暮腥風吹滿野。九連城上白旗高。（九連城）

戰術著書名夙揚。沈身東海又堪傷。九泉定見丁提督。共歎王師不可當。（弔廝提督）

火箭雷轟不可防。千餘將卒葬魚腸。百年遺恨長蛇逸。猛雨疾風玄海洋。（常陸丸）

十有六時彈雨間。鐵條網下仰躋攀。遼東灼熱也何恐。占得天邊扇子山。（南山一稱扇子山）

五峰觀外亂兵中。一喝縱橫氣倍雄。斫十餘人刀作鋸。淋漓血滴滿身紅。（吉井小尉）

海陸公報

大石橋戰鬪公報

七月廿八日午後大本營着電　奥大將報告

第二軍の前進

廿三日午前四時軍は蓋平附近の陣地線を出發し各縱隊は共に少數の敵を擊退して流家溝より花兒山を經て五臺山附近に亘る線を占領せり此日軍の左翼方面には步騎各一中隊を有する敵の步騎兵若干部隊ありて屢々抵抗せり

軍は占領したる陣地内に開進し戰備を嚴にして明日に於ける總攻擊の準備を爲せり

右翼隊の狀況

廿四日未明軍の右翼たる諸團隊は相連繫して運動を起し大平嶺及び其西方百八十の高地及び其西方の地區に向ひ前進し午前八時頃羊草勾北方高地より標高百八十の高地を經て孫家屯北方高地の東側に亘る線を占領す此時敵の砲兵は大平嶺、邊汗溝、鄭家溝附近の高地より盛んに我に向つて射擊す我砲兵は地形困難の爲め未だ十分之に應戰し得べき陣地に進入す

○松山に於ける捕虜狀況（三）

捕虜のために午前九時より十時迄、午後は二時より三時迄、此の兩度商人の出入を許してあるので、物賣りが中に入込むと忽ち四方を取卷き、譯の分らぬ露語や片言交りの日本語で互ひにがやがや喋り合ふ

（於松山…鷹原特派員寫生）

○松山に於ける捕虜狀況（四）

もとより捕虜の事で別に何等の仕事とてはなく、唯だ當番が庭や室内を掃除する位ゐであるから、多くは呑氣にトランプなどして遊んでゐる（於松山…蘆原特派員寫生）

ることは能はざりき是に於て步兵掩蔽して陣地を占領し暫く時機を待つに至れり

中央隊の狀況

軍の中央團隊は右翼諸團隊の攻擊進捗に伴ひ花兒山附近に在る砲兵の援助を受けつゝ前進し午前十時頃孫家屯北方高地を占領せしも靑石山、望馬臺間に在る多數の敵砲より猛射を受くるを以て之より前進を繼續せず以て右翼團隊の前進及び我砲兵の近接を待つに至れり

左翼隊の狀況

軍の左翼團隊は初め五臺山附近の陣地に在りしが其右方に併列せる諸團隊の攻擊進捗を見るや午前九時其第一線を以て牛家屯、劉白塔寺の線を占領し其砲兵團は太平庄附近に陣地を占め盛んに望馬臺附近の敵砲兵と射擊を交換せり

敵陣防禦完成

敵の本陣地は右翼牛心山附近より靑石山を經て太平嶺附近一帶の高地に亘り連綿せる高地に多數の防禦地區を形成し其高地は全く我攻擊地帶を瞰制し廣濶遠大なる射界を有し數層の散兵濠には銃眼を穿ち掩蓋を作り且つ諸所に鹿柴、鐵條網、地雷を設け野戰的防禦工事殆ど完成せり殊に其砲兵は巧みに地形を利用し遮蔽陣地を占め我をして殆ど其位地を判斷するに苦しましむ

○松山に於ける捕虜狀況（五）

そのトランプとても市中で買求めた物ではなく、消閑のあまり、めい〳〵煙草の空箱を切り離し、それに色鉛筆をなすりつけた手製のものであるから面白い（於松山…蘆原特派員寫生）

我砲兵の苦戰

此に對し我砲兵陣地は到る處不利にして敵眼に暴露し而も其進入は極めて困難なり然れども各方面の我砲兵は困難を冒して屢ば陣地を變換し以て步兵の攻擊を援助するに力めたるも地形斯の如くなるを以て我砲兵は非常なる苦戰に陷り死力を盡して奮戰するも其効力不十分にして敵砲を沈默せしむるに至らず軍司令官は飽まで攻擊を遂行せんとし右翼團隊に損害を顧ず突擊前進すべきを命じ團隊は猛烈なる敵の砲火を冒して前進せしも地形不利にして敵の本陣地の一部だも奪取するに至らずして日沒となれり殊に比隣團隊の一部の如きは非常の勇氣を以て一度敵陣地に突入せしも其陣地頗る堅固にして而も優勢なる敵に逆襲せられ再び舊位地に引返すの止むを得ざるに至れり

右翼團隊の夜襲

狀況斯の如くにして彼我の砲聲は日暮と共に自然に中止せられたり但し敵の砲兵の一部は午後九時迄時々我に向ひ搜射せり右翼團隊の司令官は軍司令官の意圖を實行する爲め終に夜襲を行ふの決心を取れり

軍司令官は此處置を是認せしを以て右翼團隊の司令官は午後十時より其步兵大部隊を擧げて斷然之を決行せり該團隊の步兵は猛然として勇進し大平嶺附近の堅固なる敵陣地に突入し終に第一堡壘を奪取し多數の損害を蒙りたるに拘らず更に勇を鼓して第二堡壘に突進して之を占領せり時に廿五日午前三時なりき右翼團隊に隣接せる諸團隊も亦之に續き山西塔附近の高地を占領す

各隊占領の敵陣

翌天明と共に臥龍崗附近に在る我砲兵は先づ當面の敵に向ひ砲擊を開始せり然るに敵情前日と異なるを以て臥龍崗附近に在りし團隊は直に前進して靑石山を占領す

左翼團隊は右狀況を知るや直に前進して牛心山、橋臺舖の線を占領せり

騎兵は軍の左側に在りて行動し騎步兵を有する優勢なる敵に對し能く我側背を掩護せり

○松山に於ける捕虜狀況（六）

別室の方では又一心に露國の將棊をさしてゐるのがある（於松山…蘆原特派員寫生）

大石橋占領

敵の主力は大石橋街道より一部は其東方より海城方向に退却し其後尾は我砲擊を受けつゝ午前十一時過ぎ大石橋を通過せり

軍は各縱隊の先頭部隊を以て之を追擊し次で大石橋及び其附近を占領せり

敵は五個師團

我に對せし敵は第一、第二、第九、第三十五師團及び西伯利亞豫備師團に屬する部隊にして其砲數は約百二十門なるが如し

敵將官二名負傷

捕虜將校の言によれば滿洲軍總督クロパトキンは戰塲に在り而してサワロフ中將、コンドラドウイッチ少將負傷せりと又諸情報を綜合すれば敵の死傷は少なくも二千を下らず我死傷將校以下千名内外なり戰利品及び捕虜若干取調中なり

敵俄に退却す

敵は我追擊の爲め頗る狼狽を極めて退却せり察するに敵は靑石山附近の陣地を堅固に占領し茲に決戰を爲さんと企てたるもの、如し然るに夜半に至り俄に退却を決行したるの形跡あり其原因は我右翼の強襲により彼の左翼守を失ひたるが如し

大石橋附近の死傷者

三十日午前大本營着電奥大將報告

大石橋附近の戰闘に於ける我軍の死傷者如左

戰死者

砲兵少佐　石川嘉三郎
步兵大尉　永井成太郎
同　大尉　坂戸直吉
步兵少尉　久吉道雄
步兵中尉　吉元朝吉
砲兵大尉　森　秀吉
步兵中尉　小河義夫
步兵大尉　井上　勝
步兵大尉　橫山富三郎
同　少尉　近藤信治

同　中尉　坪內　銳雄

重傷者

步兵少尉　豊永信次郎
同　長井　武三
同　少尉　窪津　義夫
同　大尉　中村　恒太
砲兵中尉　三宅　守彦
砲兵大尉　岩井荷一郎
同　少尉　名倉　定眞
砲兵少尉　吉見　隆治

輕傷者

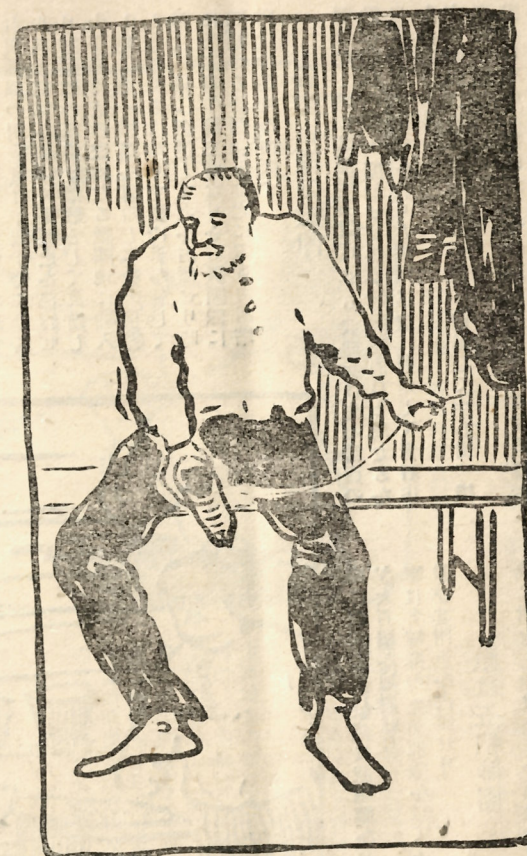
步兵中尉　服部　暢義
同　少尉　早川　亮一
同特務曹長　加川寅次郎
同　少尉　吉岡朝太郎
同特務曹長　熊谷眞一郎
步兵少尉　池田賢之助
同　少佐　千秋　勤
同　中尉　吉澤美代作
砲兵中尉　國川　完吾
步兵中尉　折田　有倫
砲兵中尉　前田　實
三等主計　香村英太郎
砲兵特務曹長　川上　大岸
步兵中尉　猪村晴次郎
同　少尉　川本　常磐
同　大尉　田中　光義
同　少尉　武永鐵之助
一等軍醫　阪本　靜一
砲兵中尉　兩角　豐
步兵中尉　松岡　喜作
砲兵少佐　竹內　順次
同　大尉　川尻露太郎
同　少尉　黒江　敬吉
同特務曹長　布施　昇

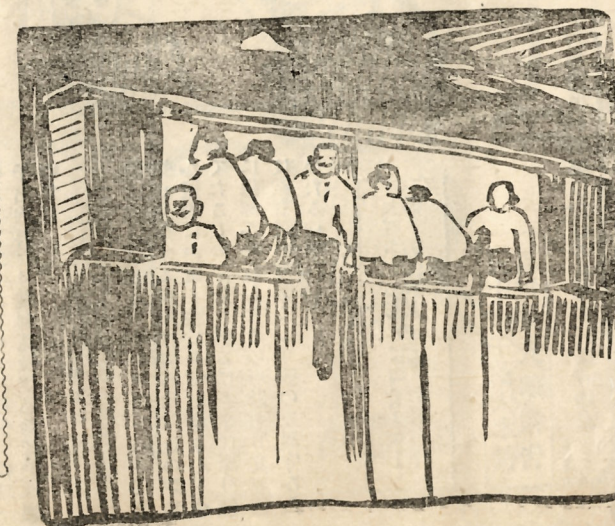
微傷者

步兵少佐　藤岡錄三郎
砲兵少尉　公文初次郎
同　中尉　三浦源太郎
步兵特務曹長　佐野源衞門
砲兵大尉　谷口　重紀
步兵中尉　二神　義治
同　大尉　益滿竹之助
砲兵少佐　川瀨　房四
同　中尉　久保田鐵三
同　少尉　大迫　新吉
三等軍醫　河野　廣輝
砲兵少尉　阿部保太郎
同　中尉　井上　九郎
同　曾野宗太郎

以上五十九名にして下士卒戰死者百三十六名、同死傷者八百四十八名、合計一千〇七十七名なり

○松山に於ける捕虜狀況（七）

自分の着てゐた外套の破れた切離し、それで以て其靴を巧く製へ縫ふてゐるのもある（於松山…蘆原特派員寫生）

○松山に於ける捕虜狀況（八）

昨今の暑さには流石呑氣の連中も堪らぬものと見え、窓側に腰をかけて、それで何か口々に放歌して居る（於松山…蘆原特派員寫生）

露兵の殘虐

七月三十日大本營着電
旅順口包圍軍報告

七月廿七日の戰鬪に於て露兵は左の如き殘虐を働けり

一、負傷後岩石の間に潜伏して露兵の迫害を免れ歸りたる兵卒の言左の如し
敵の斥候は夜間我負傷兵の携帶品を奪ひ而る後頭部を銃鎗を以て刺し殘虐なる殺戮を行へり

二、戰場掃除隊より左の報告あり
露兵は我戰死者の金錢、時計等を奪ひ死者の眼球を抉り腕を斬り或は之を捻り取りたるもの少からず

磐嶺通路の占領

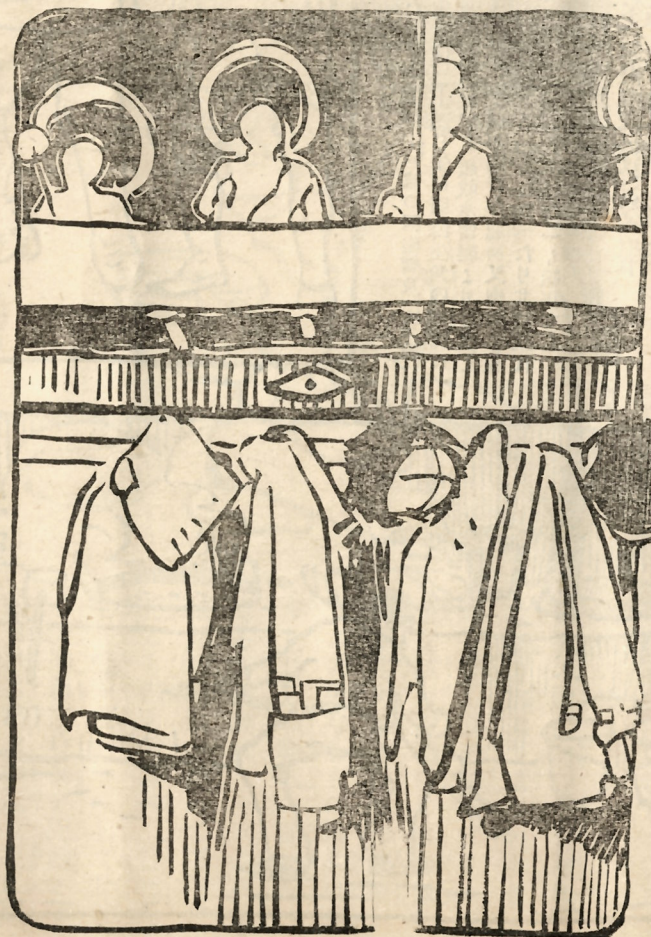
七月廿六日午前大本營着電
大孤山上陸軍報告

軍より派遣したる一枝隊は二十二日正午過ぎ磐嶺通路附近を占領せる二、三大隊の敵を包圍し突擊の後午後七時三十分全く之を占領せり敵の主力は北方に退却せり敵は狙擊步兵第十七聯隊なるが如し此戰鬪に於て我戰死少尉俣野多次郎及下士以下八負傷下士以下二十二

敵の死傷不明なるも道路上に遺棄せる死體十四、捕虜三あり

初め此の敵を攻擊するの際敵は其陣地に我國旗を樹てたるを以て我も國旗を樹てこれに應じたるに敵はこれに向て一齊射擊を行ひたり

第一軍の前進楡樹林子及び様子嶺の占領

八月二日午前大本營着電
黒木大將報告

軍は楡樹林子及様子嶺附近を堅固に占領せる敵に對し三十一日拂曉より此兩方面に向ひ攻擊運動を開始せり

楡樹林子方面の攻擊運動は同日黄昏までに豫定の如く進捗し敵の兩翼を擊破したるも敵の兵力强大にして其陣地堅固なりし爲め夜に至るも之を擊攘するを得ず依て翌一日未明再び攻擊を開始し正午に至り漸く之を擊退して老鶴嶺（楡樹林子の西方約一里半）に至る迄之を追擊せり

○松山に於ける捕虜狀況（九）

將校以下の捕虜は大抵寺院に收容しつゝあるが室內の有樣はまづこんな風である（於松山…蘆原特派員寫生）

様子嶺方面の攻擊も漸次成効し三十一日午後一時過より塔灣及マクーメンザ方向より共に步兵の攻擊前進に移り黄昏前に於て其陣地の大部を奪取せしも敵の一部は最も頑强に抵抗し夜に入るも退却せず各攻擊團體は戰闘隊形を以て夜を撤し八月一日未明再び攻擊を開始し午前八時様子嶺附近一帶の高地は全く我有に歸せり

戰闘長く終結せざりしは左の諸件に歸因せり

一、地形險峻にして攻擊動作に不便なりしこと

二、良好の砲兵陣地なく爲めに我砲兵の威力を發揚し得ざりしを

三、百度以上の炎天にして軍隊の勞苦著しかりしこと

我に對せし敵の樣子嶺附近に在りしものは狙擊步兵約二師團半砲兵約四中隊にして湯河沿方向に退却せり又楡樹林子附近に在りしものは少くも二個師團及び之に屬する砲兵にして其大部は安平方向に退却せり

彼我の死傷は尚取調中鹵獲野砲若干あるも未だ精確の報に接せず

敵の驅逐艦を擊沈す

七月二十六日午前二時二十五分着電東鄉聯合艦隊司令長官報告の要領左の如し

海軍大尉桑島省三の指揮せる第十四艇隊并に特に同艇隊に附屬したる第十號第十一號の兩砲艦及び三笠、富士の艦載水雷艇は二十四日午前頃鮮生角の東灣に潜伏せる敵　驅逐隊を攻擊し艦載水雷艇より連發したる魚形水雷は確かに三個の爆發を認め又砲艦二隻は敵に近きて之に猛烈なる砲火を加へたり其結果は煙霧の爲め未だ明ならず我艦艇には一も損傷なし

○松山に於ける捕虜狀況（十）

捕虜のうち用事ありて外出する時は必ず我兵の護衛がつきであるが、其の風體其の步き樣頗る奇であ る

（於松山…蘆原特派員寫生）

○松山に於ける捕虜狀況（十一）

捕虜當番の賄方炊事場の模樣

（於松山…蘆原特派員寫生）

驅逐隊襲擊後報

七月卅一日午後九時廿分大本營着電
東鄉聯合艦隊司令長官報告

其後の偵察に依れば去る二十四日夜鮮生角東灣に於て第十四艇隊砲艦及艦載水雷艇等の協力襲擊したる敵の驅逐隊四隻の內一隻は煙突の上部を現はして沈沒し居り尚一隻沈沒せるものあるが如し

掃海隊の苦戰

七月卅一日午後九時十五分大本營着電
東鄉聯合艦隊司令長官報告

海軍中佐廣瀨順太郎の指揮せる掃海隊は去る二十六日午前十一時過龍王島附近に於て掃海中一砲艦は敵の水雷を拘束して之を除去せんとするとき掃海索推進器に搦みて進退の自由を失ひ潮流の爲め鮮生角の方向に流され敵の要塞及砲艦等より猛烈なる射擊を受けたるを以て廣瀨中佐は自から他の砲艦を指揮し敵砲火の下に僚艦を救助曳行する際敵の驅逐艦急航し來りて水雷を發射せしも幸に命中せず苦戰約一時間のゝ漸く小平島の方向に避退するを得たり此戰鬪中救助砲艦は敵彈二個を受け卒三名戰死し廣瀨中佐荷村少尉(?)外下士卒九名負傷せり

○松山に於ける捕虜狀況（十二）

捕虜の食物は重にパンとスープとであるが食器は丼に杓子、無恰好にばくつくさま哀れにも亦おかしい

（於松山…蘆原特派員寫生）

雜錄逸話

夜襲と最近戰術

鴨綠江と云ひ南山と云ひ得利寺と云ひ我軍の勝利は主として周密なる計畫を大膽に實行したるに依ると評せられたるが最近大石橋の戰勝も亦た其の最も顯著なるものと云ふべし即ち七月廿四五日に於ける大石橋の全勝は全く右翼部隊夜襲の結果にして此の成功ありて全軍進擊の途を開きたること疑ふべからず近時武器の大進步と與に攻むるも守るも戰術の變化を來し少くとも對等の敵に向つて有功なる攻擊を加ふるは濠の如きものを穿ち其の掩蔽により突進を試むる乎若くは砲銃の照準定め難き夜陰に襲擊を行ふの外なしとの議論は進步したる戰術家の間に唱へらるゝに到れり今回の夜襲は此の議論を始めて實現したるものと云ふべく若し此の夜襲を實行せずして廿五日天明再び攻擊を開始せば前日の苦戰を繰返し更に或は大なる不利を招きたりしやも知るべからずされば右翼隊司令官の先見ある發意により軍司令官も之を認可し公報にある如く午後十時より運動を起し午前三時ま

本人にて獨逸人も彼に適する馬を發見するに困難を感ぜり左れど橋梁の建設、輕氣球の飛揚の時彼は常に其場にありき彼れの早起は有名なるものなりき兎に角其

○摩天嶺の逆襲（其二）

我兵直ちに之を擊退して敵の通路を絕つ（岡本月村子寫生）

當時斯る矮小なる日本人が何を樂みに斯る處にて日を暮すや了解に若しむ人多かりき

一千八百九十四年の頃余は彼が黑海にてドナウ河畔にてメルニアにてブルガリャにて土耳其にて撮影したる寫眞を見たり獨逸の宮中にて面したる時此寫眞の本人は愚人らしく見へたる福島氏とは知らざりき彼れ七ヶ國の語を解すれども彼れは解する如くに見えず曾て獨逸將軍某福島氏と對話すらく

（將軍）福島大尉日本にては一軍團を動員して朝鮮に上陸せしむる迄には何日を要すべきや

（福島）難有う拙者は氣分よろし閣下は如何

（將軍）否とよ、大尉、動員の事なりモビリジーレンの事なり

（福島）御尤もなり、今日好天氣なれども明日は或は雨降るべし

將軍再び福島氏に問ふも同一の事のみ云へり將軍以爲らく伯林の交際場裡に斯る言語不通の男を派するは日本政府の恥なりと此の人露國の小馬に乘りて最も小なる事まで取調べて今や露に對する萬事

○我が死傷者の收容

七月十七日敵の逆襲に際し勇闘したる我軍の死傷者を摩天嶺東麓の野戰病院に收容す（病院は名高き關帝の廟なり）（岡本月村子寫生）

地に自在鍋を吊し栗、木片を拾ひ來つて炊ぐ、陣中の自炊こそ兵士の最も勞苦する所

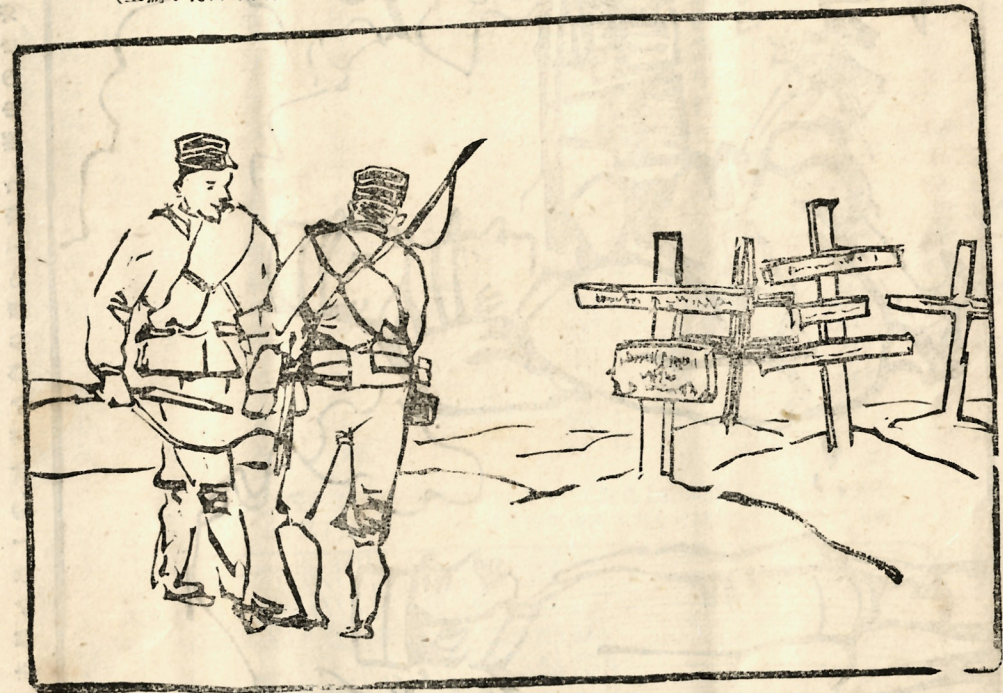
○陣中兵士の自炊

（林家屋にて　岡本月村子寫生）

を指揮しつゝあり若し露國にして彼れの眞意を知らば彼に馬を貸さゞりしものを

露軍王師の仁を悟る

露探新聞の名を博したるチャイナ、ガゼットは去る十六日の紙上にて『戰爭の慘禍』と題し左の記事を掲げたり

露國新聞通信員の說く處によれば七月六日賽馬集附近に於てレンネンカムプ將軍は日本軍を逆襲し日本軍は初め頑強なる抵抗を我前哨中隊に試みしも我が援軍の到着と共に力支へず退却し始めたり然るに後恰も我前哨線に於て兵卒ツリフォノッフ及びグリゴリエッフの二人が腰部まで裸體とせられ咽喉を扼られ且固く板に縛せられ居たるを發見したる事あるがツリフォノッフは舌を抜かれグはナイフ又は銃劍を以て其身體を寸斷せられ其慘狀目も當られぬ有樣なりしを或る者は直に日本軍人の所爲なりと叫びたりしも露軍の將校は曰く否とよ斯る蠻行は決して日本人によりて爲さるゝものにあらず兵卒の一人が現に日本軍中に武裝したる支那人を見たりと云へば必定こは其支那人の蠻行なるべし交戰以來日本軍は常に軍事上萬國の禮儀を心得能く人道主義を理解履行したれば吾人は決して此虐殺を以て彼等日本人の行爲とは信ずる能はずと從來我が王師の仁を悟る能はざりし彼露の將校が其部下の誤解を排して此言あり是が又露の新聞通信員の筆によりて露國側の新聞紙上に掲げらるゝに至りては吾人は轉た仁に抗する敵なきを嘆せざるを得ざるなり

○戰地に於ける露兵の墳墓（通遠堡）

木標錯落たり、敗殘の露兵地下の戰友を想ふて咨嗟寒心す（岡本月村子寫生）

羊拉峪の夜襲

左に掲ぐるは騎兵將校斥候として開戰の當初より現今に至るまで各方面に轉戰し夙に驍名を轟かしたる騎兵中尉由上治三郎氏が分水嶺の戰鬪に於ける夜襲の光景を先日副島伯令息道正氏に報道せしものなり

小生は〇〇混成支隊に屬し六月初め鳳凰城出發大孤山上陸軍の一部と協力し七日岫巖を占領し敵は蓋平、海城の兩街道を退却し〇〇支隊の警戒區域なる海城方面の敵は主力を柝木城に置き其南分水嶺に堅牢なる防禦工事を施し此を死守して海城の側面を掩護せんとす軍は作戰の進捗上〇〇支隊は分水嶺の敵を攻撃せり

六月廿六日運動を起し當日は其前進陣地を陷れ廿七日未明より分水嶺を攻撃せんとす、予は廿六日支隊の右側を警戒し逆進の敵を抗拒し逃走の敵を逐て進む而も名にし負ふ岫巖の地山高くして道は礫石騎兵の運動自在ならず尚ほ且つ當日は炎天燒くが如くなるも憩ふに蔭なく飲むに水なし人馬共殆んど眩せんとす然れども屈強なる我兵は克く堪へ克く戰ひ敵を破つて猛進し黄昏に至り分水嶺を去る二里の地に達し哀れ當日の疲勞を一夜の快夢に憩はんとし宿營に就くや否や午後九時命あり「由上中尉は其隊を以て右縱隊即步兵第二聯隊に屬し明朝未明羊拉峪鞍部の敵兵夜襲に參加すべし」と同時に右縱隊より命あり「由上中尉は午後十一時迄に右縱隊宿營地に到着すべし委細の命令は當地に於て達す」と顧みれば今や部下の兵卒は夕食の準備に汲々として未だ休まず馬は飼槽に首を垂れて慰饑の念に汲々たり中には食ふよりも眠らんとして横臥する馬あり嗚呼我れ今一時間の内に再び汝等に武裝を命ぜざるべからず汝等能く食らひ能く休めよと云ひつゝ一握の麥を投じ一條の青草を與ふれば馬亦一嘶を我に與へて感あるもの丶如し、午後十時三十分武裝を整へ發進右縱隊に至れば步兵も亦武裝を整へ出發の命を待ちつゝ背

○奇態なる捕虜の護送

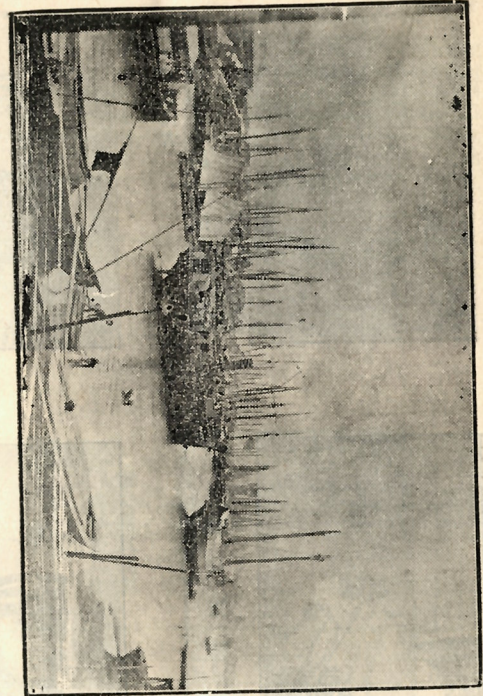
（特派員 岡部天籟子寫生）

一露兵の捕虜となりて護送さるゝを見る、頭に帽なく紅布を纏ひ、足に足袋なく支那靴を穿つ、見るから奇態、而かも傷者にあらず訥々然として能く健歩す、草河口に着し我が一士官に聞けば、彼は摩天嶺の逆襲に逃げ後れし一人にて、已むなく支那人の家に匿れ、一時銃を以て之を脅かし食を受けて二日三日と過せしが遂に清人に飯料を拂ふかさらずば出で行くかとせまられて、是非なく其銃を典し其劍を與へ帽までも取られ果ては與ふるものもなく困却の折柄、清人が日本兵に降れ日軍は戰鬪力なき汝を殺すものにあらずとすゝむるまゝしを〳〵と日中家を出で徘徊する所を首尾よく我兵に捕はれて茲に至れるなりと、無帽無履、奇態始めて釋然、顧みて相共に笑ふ

囊を枕して道と云はず畑と云はず山腹に至るまで各自席を選び短少の時間を貪りつゝ憩へり騎兵は此間石を枕に馬は立ちながら眠る予は攻撃に關する命令を受け夜半十二時出發す萬籟寂として聲なく正に之れ五更、朧月の光は幽かに吾人の進路を示すのみ、蓋し羊拉峪は分水嶺の左翼據點敵兵玆に重層の掩堡を築き據守す右縱隊の歩兵は岩石奇嶇たる脊陵を歩みて前進す其の困難想像の外に在り山頂實に九百米突の高き以て其嶮を知るべし、脊陵を歩む歩兵の歩調は谷底を進む騎兵の蹄響と

○滯陣所見――豚狩り

吶喊、々々、手を翳して進み棒を揮つて迫る、敵を追ふこと急なり、四散八亂、三十六計の術に於て豚軍又北狄に讓らず（草河口にて…社友岡本月村子寫生）

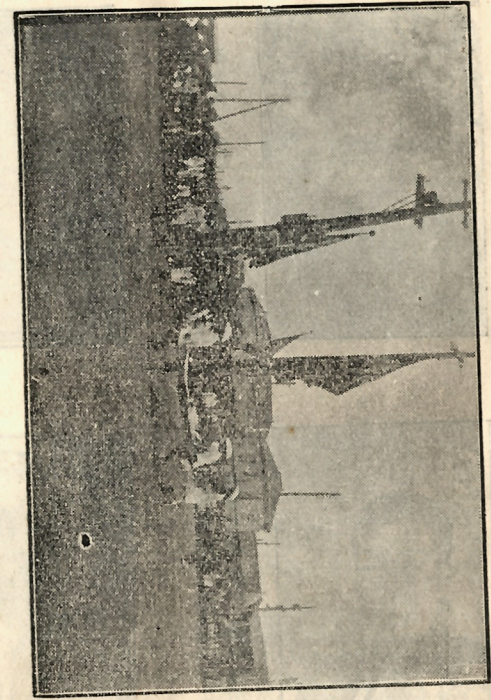
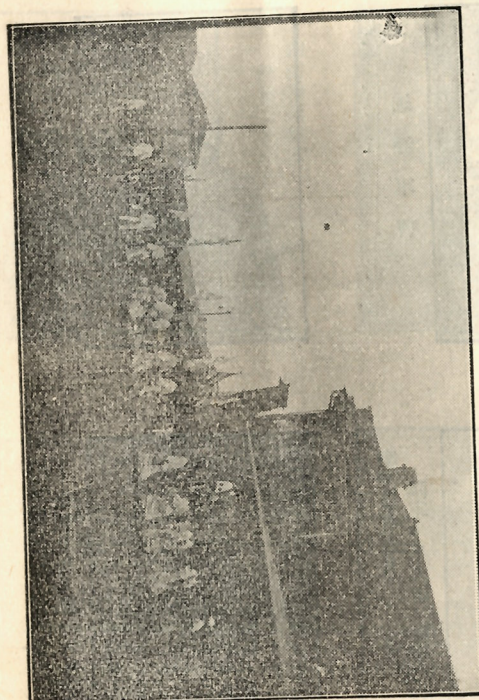
相和し歩一歩敵に肉薄す、月の西山に落ち東天將さに緋ならんとする頃脊陵に在りし敵の警戒部隊我が歩兵の先頭と衝突し銃聲猛なり鞍部の敵兵其の頭上に猛烈なる射撃の音を聞き取るものも取らず倉惶狼狽して先づ山頂の最高所に向け退却せり重層の掩堡遂に何の用をなさず棄つるに餘りに敏なる寧ろ憫笑の至りなり此の機に乘じ予は直ちに鞍部を占領す敵は山頂より我を射撃したれども其の位置不明なる爲め我之れに應ぜず我歩兵は逐次敵を壓迫し遂に山頂に迫まる山頂の敵兵屛風の如く吃立せる岩石を超へて潰走し其殘部六十餘名は谷を下り逃げんとす騎兵は之に向て射撃す敵窮し岩石の空隙に隱る歩兵之に迫り全部を捕虜とす歩兵は更に山頂を超へ分水嶺の左翼に迫り本戰に參加せんとして進む天明と共に本戰始まる轟々たる砲聲は山岳も爲めに崩れんとす本戰は數時間に亘る激戰の後敵を破る此陣地後方は既に一條の堤道構築せられ鐵軌さへ敷けば正さに是れ東淸鐵道の

○松山の浮虜

松山市大林寺に收容しあるもの、前方に「コザツク」の正服を着くるは負傷全癒して蓮廢捕虜となりたるものなり

○小倉豫備病院の負傷者

孰れも第十二師團に屬するものにして鴨綠江、九連城、蛤蟆塘に激戰したる勇士なり

○大川口の帆檣林立
浦潮艦隊東京灣外を游弋してより船舶の出入全く途絶し大川口爲めに船を以て水面を埋むるが如し（七月二十九日撮影）

○第二軍の從軍記者
三脚に據して中央に在るは即ち本社の特派員小杉未醒氏なり

○負傷將士の新橋着
七月二十六日撮影せるもの上圖は重傷者を擔架にて運搬する所、下圖は徒歩せる輕傷者なり。

一支線あり敵の重きを玆に置きたる以て知るべきなり敵は糧食彈藥庫悉く燒きしと云ふ

日本騎兵の實力

ロンドン六月二十八日發にて米國の或筋への電報によれば是迄日本軍隊の一大欠點を以て目せられし騎兵は實戰に臨み意外にも有力にしてたゞに露國コサック騎兵と相對して遜色なきのみならず山地に於る戰鬪には遙にコサック騎兵を凌ぐものありと

日露兩兵一所に物を購ふ

某師團中隊長陸軍步兵大尉高田豐樹氏(三十一)は金澤藩の士族にて陸軍大學校を出でたる有望の士官なり目下摩天嶺附近に在る由なるが此頃大尉より同家に寄せたる書簡頗る趣味あり左に抄錄す『其後も相變らず箱根の如き山水明眉の山中に山籠り致し居り前方約一里の眼下には敵の幕營を明かに數へ得る迄に接近し居れば時々敵の哨兵を狙ひ擊ちに出掛け今日は一人今日は二人と手柄を誇り居る樣丸で獵にでも行きたるかの樣に御座候併し時には我兵も負傷致す事も有之候殊に面白きは彼我の中間にある一村に支那人の一商家ありて砂糖煙草等を商ひ居り我兵にて是等の品

○特派員の訣別

蘆原「昨はお互ひに半年振りで會ふた嬉しまぎれに一夜呑み明したが、今は又た君と誓くのお別れだねえ、しかし君はいよ〳〵戰地從軍でいゝが、僕はまだ何んの御沙汰もなしで此處に居据はり、いかにも辛いよ、兎に角君の行は壯にして羨ましいね。小杉「いや〳〵君もう暫く辛棒し給へ其内にはきつと沙汰があるよ、其時は君は艦上僕は遼陽海陸二つの筆陣お互ひに益々多事だね。蘆原「よしお互に遠くなるとも君の健骨僕の變骨益々自愛してやらうぞ、さらば〳〵。句あり曰く

小「驟見の旅や平沙の雲の峰

蘆「友は今船の中なり雲の峰

（七月廿四日於宇品港…特派員蘆原驟子）

○看護手劍を拔ひて柳枝をきり捕虜負傷兵のために鐘木杖をつくる

（岡部特派員寫生）

「頭部傷の綳帶巻きかへ」

に乏しき物は時々買物に出掛けると敵も亦此の家に買物に來り折々兩方の兵の店前にて行會ふ事ありて雙方顔見合せて共に何物をも買はずして歸りたりしが此頃にては日本兵は平氣にて晝間出掛ける樣になり露助は狐鼠々々と夜間に來る樣に自然と區別相立ち候も可笑しく候』

握手して降參

捕虜の露兵の話に日本の取扱ひの丁寧なるを思へば今少し早く降參すれば宜かりしと殘念に思ふ位にて加之に今迄我等の中隊は不幸にして戰鬪に列せず今回幸ひに捕虜となり日本軍のお世話になるは此の上の喜びはなしなど云ひ頗る呑氣に構へ居りて尙ほ時々前哨にて捕へらるゝ露兵も大方は自ら望んで降參に來るもの多く捕虜となる折なども頗る滿足の體にて笑つて我が兵を迎へ握手を求めし上食指を交叉し十字を畫き何分賴むとの意を示す其の圖々しさには呆れ返れど豈夫に撲る事もならずと

○露兵の水筒と帽子

（い）木製
（ろ）眞田に似たる紐
（は）アルミニユーム

（岡部特派員寫生）

○陣外一日――想佳園の開園式（岡部特派員寫生）

草河口に於ける第一軍の軍醫部、工兵部、砲兵部、皆一棟の下にあり、屋外に溪流通じ流れに沿ふて一平地を見る、樹木生ひ茂りて空翠滴たらんとし清趣おのづから湧く、三部長雅懷禁ずる能はず、即ち水を引いて瀧を作り土を盛りて山となし、雜草を刈りてこゝに公園をなせり。園の正門、一札を掛けて想佳園と大書す其の左側に柳樹あり、之を見返り柳と云ひ、芝生の地をうれし野と云ふ、森の名を忍ぶの森と呼び天幕を張りて鮮美亭と稱す、清川の園中を流るゝを戀し川とし、之に一橋を架す、橋材皆柳、由つて柳橋と名づく、石燈籠を造りておまち燈籠といひ、瀧を逢瀬の瀧と唱ふ、山二ツ、一を逢初山、一を子持山と號し、更に園の裏手に木戸を設けて之を人目の關と云ふ。園既に成り命名亦整ふ、七月十七日午後六時、三部長主催者となつて、宮殿下及び司令官を始め近傍の各將校等を招き、開園の式を擧ぐ、來賓六十餘名、三鞭酒あり、葡萄酒あり、麥酒あり、日本酒あり、飯は鷄飯、菜は薩摩汁、呑むもの、食ふもの、久方振りの歡會にしたゝか胃の腑を驚かし、主客陶然として清興を恣にす、うれし野に立ちては朝來摩天嶺方面の砲聲に就て我が勝利を祝ふもあり、戀し川に臨んでは内地より來れる書狀に家郷を語らへるもあり、人目の關を忍ぶの森、去歲の春をば見かへり柳の醉ふては柳橋を夢む風流漢もあらんか、見そめ逢ひそめ子持山、國には我をおまち燈籠の逢瀬の瀧を偲ぶもあらんか、三軍の巷を馳驅して死を視る歸するが如く征戰幾月、草枕露しげくて矛取るものゝふの身にも是や陣外一日の春流石ゆかしき園の名に三部長の風韻をたゝへていづれも笑ひこけぬはなかりき、かくて餘興には落語、薩摩琵琶及び從軍寫眞斑の幻燈等ありて喝采鳴りもやまず散會せしは夜の十一時過ぎ、星空に冴えて遼東の野寂たる頃なりし。（圖中最も左なるは久邇宮殿下にして其先なるは黑木司令官なり）。

露將日本軍の眞價を認む

得利寺の役に負傷したる露將の一人アッソシエーッテド、プレッスの一通信員に語りて曰く得利寺役は雙方共非常の死傷を出だしたり露國側の戰死者確かに七千はありたるべし彼の役に於ける日本軍の戰ひ振りは敏捷猛烈にして世界中何國の軍隊と雖も日本兵に抵抗し得べきものあらざるべし又日本砲兵の砲撃の如きは百發百中實に凄じきものあり露兵は死を賭して頑强に抵抗したれども到底日本の峻烈なる猛進を禦ぐ能はざりき云々と七月二十日牛莊發電に見えたり

○廣島豫備病院の面會所（二）

愛兒の負傷して病院にありとの報を得、老の夫婦が取るものも取り敢へず馳せ來りて、傷の樣子やら戰の樣やら且つ問ひ且つ語りてあたり憚からぬ大聲、親子の情思ひやらる

（蘆原特派員寫生）

○廣島豫備病院の面會所（一）

數人の兵士其友なる一人の負傷兵を取卷き當時の戰況を聞きて或は悲み或は奮ひ轉た髀肉の感に堪へざるもの丶如し

（蘆原特派員寫生）

退却は演習に於ても不手際なり

平時の演習に在りて、我兵が已むを得ずして退却運動をなすや、常に不手際にして失敗に歸す、日露戰爭あるや、我軍百戰百勝未だ一たびも背を敵に示さず、開戰ある毎に各將校兵士皆曰く『死するか、勝つかの二途あるのみ』と、我軍隊既に此の決心あり露兵決して恐るゝに足らず

敵の展望兵二名を斃す

丸尾少尉の部下に一等卒中村三五郎、同高橋慶次郎なる者あり、平生名手を以て其の各隊中に顯はる、石門嶺の戰、敵の展望二名高地に在りて我軍の運動を監視す、一等卒互に相告げて曰く『一丸以て彼等に酬ひんと』徐かに距離目測をなして照準を正し各一發之れを射る、敵兵爆聲に應じて斃れ岸下に落ちて死す

壯烈なる絶筆

（横山步兵大尉の事）

大石橋役の戰死將校步兵大尉横山富三郎氏（岐阜縣羽島郡松枝村出身）は第○師團步兵第○聯隊中隊長にして南山役に殊功ありし人なり、七月十三日附を以て在京なる家兄横山徳太郎氏（岩崎男家庭教師、元岐阜高等小學校長）に宛て寄せたる書簡は實に氏の絶筆とす左に要領を抄す

（前略）難に遭うて愈〻振ふは男子の常事なり千辛萬苦屁の如し、國恩に酬ゆる正に此時に在り、國民諸君の熱誠に酬ゆる正に此秋なり、千辛萬苦寧ろ甘きこと砂糖の如し兄上（徳太郎氏を指す）富公（大尉自身を云ふ）の身上に關しては意を勞せらる勿れ、必らず遣るべき決心なり生死既に超脱す唯だ古人の訓言を守る曰く、英雄死處を選まざるべからず、死して不朽の見込みあらば何時にても死すべし、生きて大業の見込みあらば何時にても生くべし、（中略）日露戰爭の十年二十年續けば二十年、唯だ彼が屈服を見極めず

○廣島豫備病院の面會所（三）

一家一族打連れて訪ひ來り、汗たら〳〵打語りて泣くやら笑ふやら、眞情はたの見る目にもいぢらし

（蘆原特派員寫生）

んば死すとも死すること能はざるなり

又た氏が熊岳城附近の行軍の狀を報ずる文中次の如きものあり

七月七日午前四時出發し第〇〇隊は前衛となり周家屯に向ふ山を登り谷を越え右に廻り左に迂り暑は暑し水はなし岩石斷崖を踏破して漸く昨日の無名山絕頂を大隊全部にて占領せり一兵あり氣息奄々將に頂上に達せんとして終に岩石上に疲れ倒れてシク〳〵泣き出し落涙に及ぶ富公(大尉自身を云ふ)も亦優しき聲して泣くな〳〵と慰むるも同情の感に打たれたり、大隊長殿はブランデー酒を一口此兵に與へられ富公は大事の大事の水筒の水を與へ飲ませて曰く此處に倒れても仕方なし敵兵來れば殺さるゝことは必然なり我慢して行けよと蟲の匍ふ如く連れ行く心の中ぞ氣の毒なり、時に午後二時頃暑きこと限りなく暫く休みて又前進す(下略)

○廣島豫備病院面會所(四)

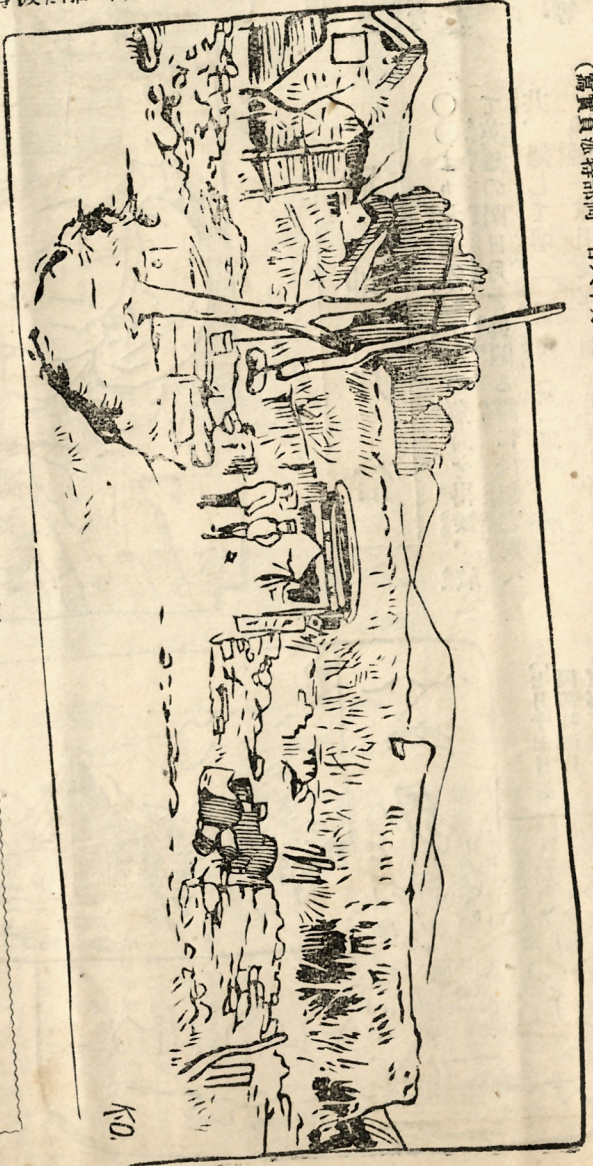
夫の負傷を聞き百里を遠しとせずして至る、面會室にありて待てど暮らせど其人見えず、遇々其兵の綳帶巻換とて時間に促がされ、空しく歸り去る女房がいかにも氣の毒なり(蘆原特派員寫生)

○廣島豫備病院面會所(五)

妻にもあらず、夫にもみえず、ふたり相對してめやかに打語らふ、連日の見舞しほらしく、さては此人出征前に出雲の神のゆるし給ひし仲か(蘆原特派員寫生)

戰友の屍を負ふ

(某の手紙一節)

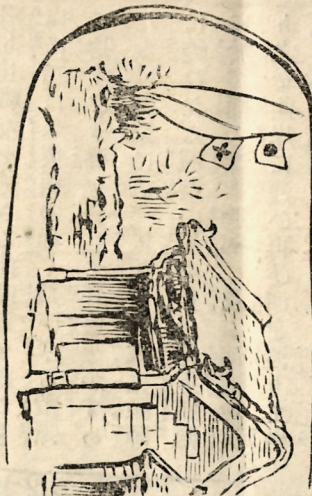
近衛師團は日清の役少しの瑕瑾のため世人目して弱となし唯國家の飾に過ぎざるものと想ひ居り申候へども其實力は猶ほ九州北國の强と相頡抗するもの有之候一騎卒あり其名を逸するを恨む過般斥候となり敵の伏に陷り其戰友を斃さる此時敵を距ると僅に二百米突雨の如く飛び來る敵彈は物すごき聲を發して耳邊をかすめたるは勿論に御座候此瞬時彼は敵陣に斃れたる戰友の屍を負ひ此近距離に於て而も深さ胸部に及ぶ河流を渡り之を此岸に運び再び河を渡りて敵岸に渡り斃れたる馬の鞍を脫して之れを負ひ又々之れを此の岸に運び從容整服退却を全うせりと眞勇嘆賞措く能はざるものあるにあらずや此の如きの例將校下士卒に珍しからず流石は神州男兒に御座候されば直ちに感狀を授與せられたりと申候情報に依るに第二第三等の諸軍に於ても同樣なりと君國の爲め慶賀に不堪候

○草河口に於ける第一軍司令部

特派員所記して曰く、朽ちかゝつた衛木門の右側に小さき日章旗を揭げ其下に白木綿に第一軍司令部と大書したのがきげてある、左にはズツク製の赤き郵便箱がある、家は例の茅葺の見るもいぶせき古小屋で、我國の水呑百姓でも住み兼ねるであらうと思はれる、其の小屋の中に司令官、參謀長等は固より、貴くも竹の園生の御身なる久邇宮殿下さへ今現に御起居遊ばされてゐるのである……(七月十八日…閲部特派員寫眞)

恤兵品の感謝

(某の手紙一節)

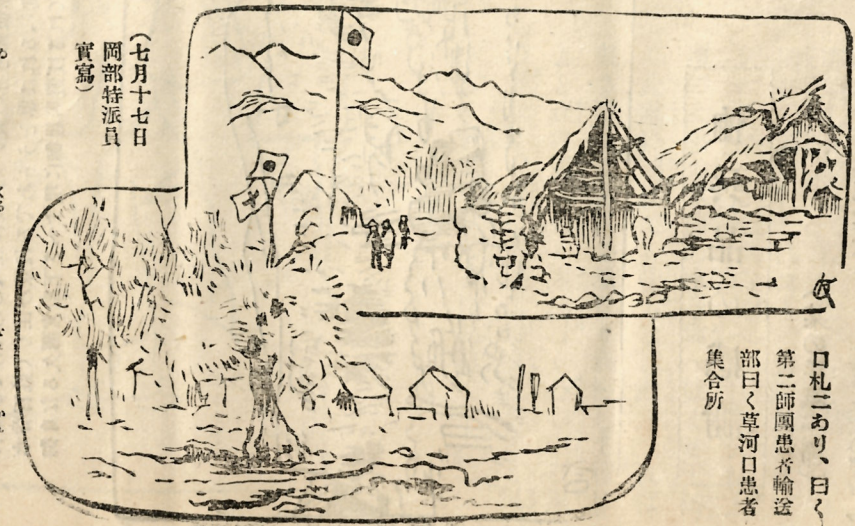
余等は本日恤兵品として煙草手拭扇子帽

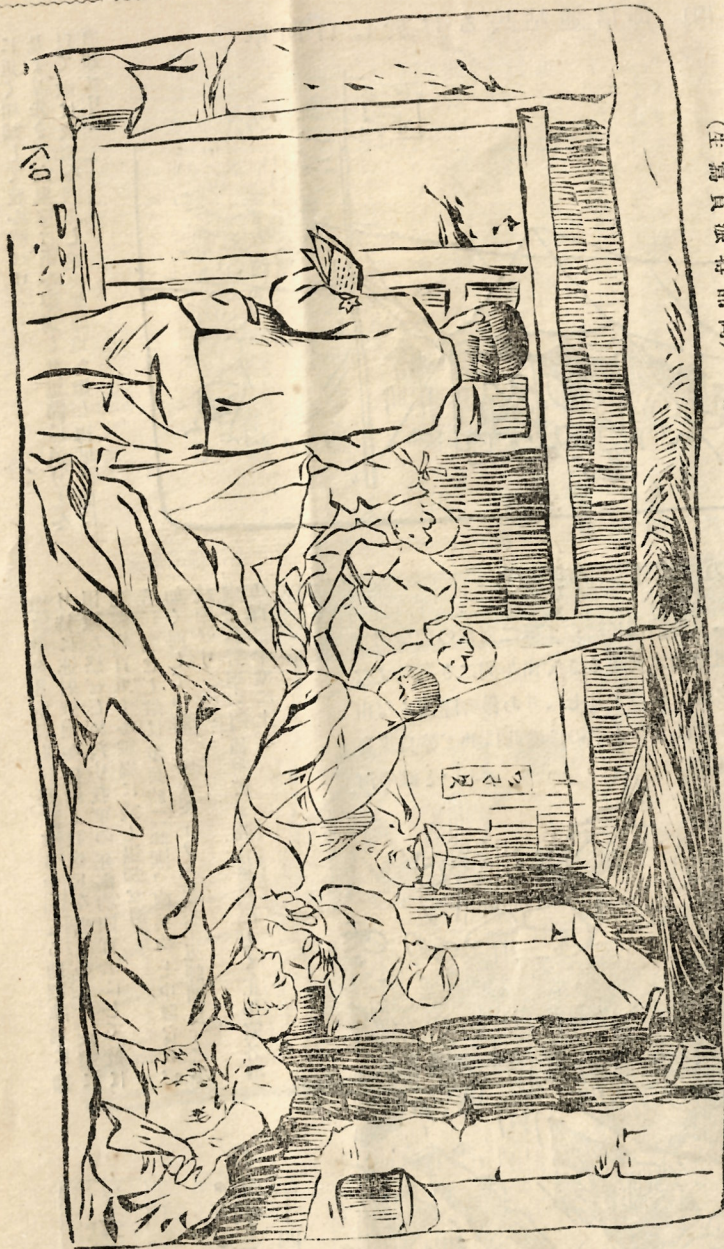
○威家堡子患者療養所門前と
第二號室の我が傷病兵
（七月廿日連山關に進む途次威家堡子にて…岡部特派員寫實）

子乖巾蚊除等を受領せり遠く異域に在りて同胞の惠贈を受くる嬉しさは實驗せざる者の想ひ到らざる所也此物品は可憐なる少年少女が其父母より貰ひたる金錢を寄附せしもあらむ或は日常の生活も足らぬ勝の人々が奮て寄贈せしもあらむ余等は之を念ひて一本の煙草も粗略に喫消せじ而して此等同胞の厚意に對し誓て國敵を退治せざれば已まざる也

戰地片信

○○より北進の途中左の蕪詩を得候、敢て英雄の閑日月を眞似る譯には無之候へ共、錄して博一粲候（第一軍の一兵卒）

蜿蜒一隊引長蛇。劍影迷離日漸斜。
自笑行軍情致富。荒原避踏女郎花。

▲喉は乾く飲料は乏しい暑氣は日によると百度以上にも上る、其れでも氣の張つて居るせいか苦しいとも何とも感せぬ、思へば僅かの暑氣に避暑旅行などせし昔

（七月十七日岡部特派員實寫）

○草河口兵站司令部
口札二あり、曰く第二師團患者輸送部曰く草河口患者集合所

し淺まし（遼東半島の一角に於て一兵卒）

▲行軍の途中樹木の影にて凉を納るゝ際例のチャン先生が逸早く清水を持ち運び吳るゝは何より嬉しく地獄に佛とは此事ならんかと被思候（摩天嶺麓生）

▲イヤハヤ輜重輸卒程苦しきものは無之候併し此も御國の爲と思ひ直せば一兵卒に蹴られた時でも不平は忽ち消散いたし候ソコデ「藤の蔓長と短かはあるめれど咲き出る花は變らじと思ふ（蓋州の一輸卒）

○威家堡子患者療養所第四號室に於ける負傷捕虜の看護
（岡部特派員寫生）

析木城の占領

八月二日午前大本營着電
析木城攻擊軍報告

軍の前面に在る敵は紅窰嶺北方高地より章三峪を經て三角山東方高地に亘り堅固なる防禦工事を爲し紅窰嶺南方高地には砲兵肩墻を見る又老達子附近に約三大隊の敵兵あり軍は此敵に對し去七月三十日を以て大房身西方高地より下八盆溝北方高地に亘る線を左翼隊を以て賈家堡子南方高地より英落山西方高地に亘る線を占領せり

翌三十一日拂曉軍は主力を以て三角山東方高地の敵に向ひ左翼隊を以て東西楊樹溝北方高地の敵に向ひ攻擊を開始し左翼隊は午前八時頃東楊樹溝東北方標高三百四十五米突以西一帶の敵陣地を攻落せり然るに二道溝方面に在りては敵益々其兵力を增加し其砲兵は約二十一門に增加せしも我左翼隊は新に來着せる一枝隊と協力し猛烈なる砲戰の後之を攻擊し午後三時の頃遂に之を北方に擊退せり軍の主力は午前十時三十分の頃太平嶺西方高地の敵陣地を攻落するを得たるも章三峪及び小房身東方高地に在る敵砲兵より猛烈なる射擊を受け前進を繼續する能はず其後敵は漸次新鋭の兵力を增加し午後五時半頃に至り全線攻勢に轉じ來れり我步砲兵直に之を擊退し敵に多大の損害を與へしも敵砲の猛射の爲め追擊する能はず遂

○草河口に於ける兵站通信部　（岡部特派員寫生）

に近く相接して夜を徹せり
是より先き我左翼隊は敵を擊退し其退路に迫りしを以て敵は夜暗を利用し逐次其陣地を撤し海城方面に退却せり

敵は數箇月を費して築造せる堅固なる防禦陣地に據り特に速射野砲を猛射し我砲兵を苦しめ大に攻擊に困難を感ぜしめたり我軍の死傷約四百名にして敵は死體約百五十を戰場に殘し退却せり
我に對せし敵は步兵約二師團、砲兵約七中隊なるが如く而して中將アレキセーフ（步兵第五師團長）之を統率せり
鹵獲品野砲六門捕虜若干此日炎熱酷しく正午室外華氏百二十度に上る

○草河の瀧

軍司令部の前面二三丁の所に溪流あり、水懸崖に激して小瀑をなす、高さ二間を出でざるも其水清冽風趣掬すべく恰も我が晃山なる霧降の俤あり、七月二十日久邇宮殿下、黒木大將、藤井參謀長等と共に此處にのぞませられたる時、參謀長命名して草河の瀧といふ　（岡部特派員寫生）

畫帖日記（一）

未醒

○七月二十三日、出帆の豫定一日延びて二十四日の午後三時解纜、同行三十八人、

胴體はカーキー色に白布朱書の腕章相似たれども、がん首は十人十色の面相樣々也。

○一路平安、瀨戸海を過ぐ、今年一月韓山に向ひし時は、寒風陣々襟毛の外套を徹せしが、今日は七月の空晴れて涼風汗を收む。

○同二十五日、の朝門司を過ぐ、素通り也、蕪村のまねして曰く

よらで行く渡唐の船や雲の峯

岸柳島の傍にフワナとマストの波に洗はれつゝあるは、常陸丸騷動の折、面くらつて沈沒したる汽船也、體たらく甚だ面白からず。

○玄海灘は意外に平穩也、殆ど疊の上を行くが如し、船にさへ醉はずば筆も八丁口も八丁の同人皆な欄干に倚つて三十根の舌動いてひまなし。

○食卓狹まうして六十の膝を並ぶるに足らず、二分して第一軍第二軍となし、一食毎に前後交代す、夜

○從軍途上（一）

後甲板の觀月、行客筆を載せて今遼陽に向ふ（七月廿六日…小杉特派員寫生）

戰地畫報　特派員　小杉未醒子

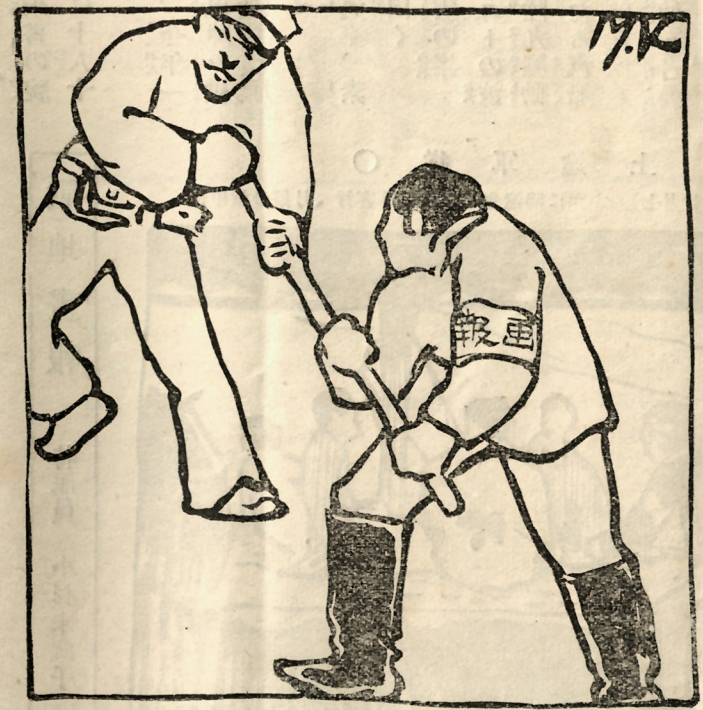
法律新聞從軍記者矢島なにがしとは世を忍ぶかりの名、まことは張り扇の大家松林伯鶴先生、一席の講談を試む、題に曰く嗚呼忠哉石川五一。

○同二十六日、平なりと雖も流石に大海也、船微しく動いて食卓上の客三分の一を減ず。

○同二十七日、天陰り波騷ぐ、甲板上に人影なし。

○同二十八日、投錨したる地名は曰く云ふべからず、事軍機に係るを以て也。

○出帆の豫定なりしが軍機上に事故やありけむ、空しく暮らしつ、夕の潮のさすまゝに外洋の方より砲艦濟遠近く吾船の傍に來つて碇を投じぬ、記者黨も兵士連も誰が始むるともなく聲の限りを出して萬歲を唱ふれば、彼方は同じ水深の測量を行ひつゝある時とて、酬應の聲こそなけれ、艦上の人悉く帽を打振る、夕陽落つる時、檣頭の軍艦旗の旭日章も亦徐ろに下りぬ、暮色蒼茫、烟波千里。

◎同二十九日、濃霧のため今日も碇泊、記者黨の食卓上、のろけ箱の擧あり、是より先き第一分室の一連十人許、船中の消閑として制を立て、曰く、「已に筆を載せて干戈の間に入らむとするものいかばかり辛き別れの身に染みて、夜半の夢に通ふとも、尾籠千萬なるのろけなんどの言これある可からず、犯したるものは金壹圓の科料たる可し、但し當人の辯解の外志あるもの、辯護を聞いて後、之を衆議に附し、多數に由って之を定むべし、若し肯かずんば腕力を以て之が強制をなすべし」と而して小生が性急にして假借なきを以ての故に、刑の執行委員として罰金の保管を兼ねたり、かくて幾ならず圓助取上げの憂目に遇ひるたもの、大阪新報の小田垣、同毎日の松内、萬朝の稻田の三氏、此事一黨の内に喧傳して遂に其規操を張り、制を改めて三十人皆其法に從ふ、濱名納豆の空き鑵を封じて上面に穴を穿ち罰金十錢、片言と雖も苟も發すなし、午後五時、天漸く晴れぬ、明日は想ふに上陸するなる可し。

○從軍途上（二）

天晴れて波靜に、船路に飽きたる記者連と兵士黨、徒然の餘、夕陽の下後甲板に於て腕力を試む坐り角力、南京角力、腕押し、棒押し、重いものは筆より外に持った事なき記者連またなかなか侮る可らず、笑聲湧き叱咤起る、遂に兩者のチャンピオンとして選ばれたるもの、歩兵の某君と畫報の小生、棒捻りが今日の決勝戰としてエイヤオイの掛聲兩々汗を絞りしが、勝は辛くも記者連に歸したり、編輯局諸位乞ふ安んぜよ、遼陽奉天、畫報を致す事また方に此の如くならむ呵々

（七月二十七日…小杉特派員寫生）

▲正誤。本號出鱈目の記、駁黄禍論の項に「成吉思可汗、鐵木眞、忽必烈汗云々」、とある中の成吉思可汗の五字を削る。

▲正誤。前號木版繪畫中、負傷兵山内一等卒の談話、左縱隊の戰況、島谷騎兵一等卒の談話等を廣原特派員寫生とあるは寫意の誤り、又田内、印藤、満谷、河合寫生とあるは同樣校正の見誤りにつき、茲に正誤します。

◉アルボース！

◉アルボースは賣藥でない

◉内務省傳染病研究所、北里博士養生園、東京病院警察署、監獄署等の用品にて、また東京各區役所衛生掛りの備付品です

◉報知新聞に某醫學博士談として家庭欄に左の記事が掲げられた

◉アルボースは安全なる、石鹼性の消毒劑であるから普通の石鹼同樣、入浴でも洗濯でも、臭氣止めでも總て日用品として使はれる、其の結果は、使用者自身の知らぬ間に、自然惡疫の豫防消毒をして居る道理だ云々

◉大阪每日新聞

◉アルボース石鹼は日用石鹼の効用以外公衆衛生用として廣く世間に使用せられ、九州四國地方にては警察官の携帶品となり、又温泉場に於て盛んに流行し居れり云々

◉雜誌戰報は軍人の携帶必需品として第一にアルボース石鹼を紹介した其の末文は左の通りです

◉如何なる石鹼もアルボースの十分一の消毒力すら石鹼中に含有せしめ難きは其製造時に於て熱度の爲に藥力分解して其の効を失する者なればなり然るにアルボース液同樣の殺菌力を含有せしめ得るはアルボース石鹼の特性にて歐米各國にも及ぶ者なし之れアルボースの輸出せらるゝに至りたる所以なり

◉アルボース液及び石鹼は全國の藥店小間物店にあり

◉湯屋床屋に行く人は必す

◉梅毒或は禿頭病其他の皮膚病は、多く湯屋床屋で傳染するものですアルボース石鹼が同液を忘れてはならぬ

◉一家の經濟上に大切です

◉不用の時、簞笥に入れて置けば、衣服は勿論毛皮類に決て虫のつくことがないから、樟腦を買はずにすむのです、洗濯、入浴、手洗に使つた使ひかすの流し水で自然に、下水、掃溜めの臭氣止め、消毒となるから、蚊の發生も減るのです、夫れで日用石鹼としては、他の石鹼同樣に役立つのです、何んと便利德用の經濟品ではないか

◉化粧用としても必用です

◉他の見かけばかりの、粗製品と違ひ、石鹼性原料には、五十錢以上の舶來石鹼の外に、用ひてない彼ボッタースを以て製したものですから、皮膚をあらさない、にきび其他の腫物が出來ぬ樣になる

◉あせぼ唯一の治療劑です

◉田虫其他の皮膚病に有効なるは勿論ですが分けてにきび、を即治するの特効劑として名高いのです子持ちの婦人は、此の點に注意して、使用を怠らぬ樣せねはならぬ、刺激しても石鹼性ですから直ぐ洗ひ落して幾度も塗りつけるがよいです、常に使用して居れば豫防するから出來ずにすむ

◉今は全國アルボースの便益効力を知らぬ人はない必ず試るべき品です

外用 貴女の友

◉歐米人は一名男女旅行必携と稱す

◉婦人は子宮一切の病に用ひられよ

◉社會改良實論中に於て左の如く世に紹介せられたり

◉男女互に梅毒、痳病、消渇の傳染を豫防するのみならず避妊の目的を達するに於て最も確實に、最も安全に、最も廉價なる者として、余は「貴女の友」の使用を、勸告せんとする者なり

◉加藤病院院長ドクトル加藤先生は雜誌直言中に於て左の如く記るされたり

◉(前畧)「貴女の友」は一種の坐藥にして「キニーン」「タンニン」等を含み、收歛殺菌の作用を有するが故に之を使用する時は、婦人生殖器内に於て、精系及び一般花柳病の病原菌に對し、侵擊力を有するもの(中畧)此の種の藥品としては、最も輕便にして、本劑が或る理由の下に有力なるを疑はざるなり

◉梅毒、痳病等の傳染を避けんと欲する人は必ず熟讀せられよ

◉世間に有ふれたる賣藥にあらざることは右の記事にて知られよ

製造發賣元　大阪市東區今橋二丁目八番屋敷　芝富四郎

關東一手特約販賣店　東京市日本橋區本町四丁目　森田商店

外全國の重なる藥店に有り

定價 ◉壹個入壹包金五錢◉五個入壹函金貳拾五錢◉拾個入壹函金四拾錢◉三拾個入壹函金壹圓◉郵送税は別に申受く

◎美麗なる合本出來

近事畫報 第一卷（明治三十六年三月より同年八月まで） **六册合本**
近事畫報 第二卷（同年九月より本年二月まで） **六册合本**

定價各壹圓五拾錢 郵稅 內地二十錢 臺灣四拾錢

右は昨年三月より八月まで又九月より本年二月まで一ヶ年間の內地と海外の著大なる事柄を畫圖に顯はしたる者にて世界事變を眼前に看得る好個の紀念大畫帖なり

戰時畫報 第一卷（本年二月末より四月十日まで） 六册合本
戰時畫報 第二卷（四月二十日より六月十日まで） 六册合本

定價各壹圓貳拾錢 郵稅 內地十五錢 臺灣三十五錢

右は直ちに近事畫報に引續きて發行し、日露開戰となり近事畫報を改題せしものゆゑ二月開戰以後六月に至るまでの海陸戰況は十二册合計三百餘頁の大寫眞版木版寫眞版約四百種に活寫し躍動せり

以上 は讀物として龍溪鷗外兩先生を收め諸大家の美文名說を每號に揭げある故に、漫筆小說として他に類なき多趣味の者合本は四卷とも總クロース金文字入美本なれば客間、應接間等に備へ置くに適す

毎月三回 **戰時畫報** 發行

近事畫報改題

定價		
册數	定價	郵稅
一册	金十八錢	一錢五厘
三册	前金五十錢	四錢五厘
六册	前金九十六錢	九錢
十二册	前金一圓八十六錢	十八錢

○御注文は總て前金の事○郵劵代用は一割增の事○郵劵は五厘、一錢又は二錢に限る

廣告料			
等級	一頁	半頁	一行
特別	四十圓	二十五圓	六十錢
一等	三十五圓	十八圓	五十錢
二等	三十圓	十六圓	四十錢

摘要 五號活字一行二十八字詰一頁七十六行○廣告料前金の事

廣告取次 東京神田區千代田町 博報堂

明治三十七年八月七日印刷
明治三十七年八月十日發行

編輯者 東京市芝區櫻田本鄉町十七番地 國木田哲夫
發行者 東京市京橋區疊町一番地 合名會社近事畫報社 電話新橋三八三九番 柴田勝文
印刷者 東京市神田區錦町三丁目三番地 長谷川辰二郎
印刷所 東京市神田區錦町三丁目一番地 小川印刷所
發行所 東京市京橋區疊町一番地 合名會社 近事畫報社 電話本局二四四八番